

秋 田 市

# 万 固 山 天 德 寺

－重要文化財天徳寺本堂ほか2棟保存修理事業に伴う発掘調査報告書－

2020. 9 秋田市教育委員会



## 例　言

- 1 本報告は、重要文化財天徳寺本堂ほか2棟保存修理事業に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、事業主体者が宗教法人天徳寺、業務受託者が池田建設株式会社東北支店、調査担当者が秋田市教育委員会（秋田市観光文化スポーツ部文化振興課）となり実施した。本発掘調査経費については、事業主体者である宗教法人天徳寺が国庫補助金、県費補助金および市費補助金の交付を受けて負担した。なお、平成30年度に実施した確認調査は、秋田市教育委員会が調査主体となり、平成30年度国庫補助金ならびに県費補助金の交付を受けて行った。
- 3 本報告のうち、第1～4章（第3章第3節の遺構に関する部分を除く）の執筆、表の作表（第5～7表を除く）、遺物の写真撮影および図集を眞井田宏彰が行い神田和彥が補佐した。それ以外を秋田市の指示のもと業務受託者（協力業者・株式会社イビソク仙台支店菅井一希・高橋貴剣）が行つた。
- 4 平面図の礎石等の中心に示した四角形は、柱の輪郭を表す。また、建物が建った状態での調査のため、現在の建物に伴う礎石等のうち「書ほ8」は建材の下に隠れており図化できなかった。
- 5 発掘調査で出土した炭化物10点について、株式会社加速器研究所に依頼し、放射性炭素年代測定を行つた。その結果を別編に掲載した。
- 6 出土遺物および記録類は、秋田市教育委員会（秋田市観光文化スポーツ部文化振興課）が一括して保管する。
- 7 本報告と今後刊行される保存修理工事報告書の内容が異なる場合は、保存修理工事報告書の内容が優先される。
- 8 発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜つた。（敬称略・順不同）  
文化庁、秋田県教育委員会文化財保護室、富樫泰時、武藤祐浩、五十嵐一治、石井啓之、高橋和成、安田忠市、伊藤武士



## 目 次

### 例言

第1章 調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 作業の経過.....	1
第2章 遺跡の位置と環境.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 調査の方法と成果.....	8
第1節 調査の方法.....	8
第2節 基本層序.....	8
第3節 発見した遺構と遺物.....	10
第4節 磂石と東石の据え方.....	18
第4章 総括.....	47
別編 放射性炭素年代（AMS測定）.....	56
写真図版.....	61
報告書抄録.....	76



## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

宗教法人天徳寺は、本堂・書院・開山堂を半解体修理する重要文化財天徳寺本堂ほか2棟保存修理事業を国庫補助金、県費補助金および市費補助金の交付を受けて平成27年度から実施している。この事業の中で、掘削を伴う基礎改修が計画されたことを受け、秋田県指定史跡「万固山天徳寺」内での施工の可否を判断するための発掘調査を行うことについて、宗教法人天徳寺は平成31年4月11日付けで秋田県教育委員会に秋田県指定史跡の現状変更申請を提出した。これに対し、平成31年4月15日付け指令教生-147で、秋田県教育委員会より秋田市の指示のもと発掘調査を実施することを条件に許可の通知があった。

協議の結果、事業主体者が宗教法人天徳寺、調査担当者が秋田市教育委員会（担当課：秋田市観光文化スポーツ部文化振興課）となり、令和元年10月31日までに発掘調査を完了し、引き続き令和2年3月31日まで整理作業を行うこととした。また、発掘作業・整理作業の調査に関わる部分以外に関しては業務委託することとし、平成31年4月26日付けで事業主体者の宗教法人天徳寺、調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の池田建設株式会社東北支店の3者で発掘調査に関する協定書を結び、発掘調査を実施した。

発掘作業の着手は令和元年6月3日であるが、保存修理事業の工程で本堂と書院床下にある玉石の動取りが事前に行われたため、発掘作業はそれ以降の層の掘削から行うことになった。

### 第2節 作業の経過

#### 範囲確認調査（平成30年度）

平成30年8月28日付けの事前調査依頼に基づき範囲確認調査を行った。範囲確認調査については平成30年度国庫補助金および県費補助金を用いて実施し、詳細については秋田市教育委員会2019『平成30年度 秋田市遺跡確認調査報告書』で報告を行っている。

#### 範囲確認調査体制（平成30年度）

調査期間 平成30年9月18・19日、10月15～17日

調査面積 16.45 m<sup>2</sup>

調査担当者 秋田市教育委員会

調査体制 秋田市観光文化スポーツ部文化振興課

文化振興課 課長 納谷信広

文化財担当

副参事 岡部友明（調査担当）

主席主査 神田和彦（調査担当）

主査 小野隆志

主査 真井田宏彰（調査担当）

主査 佐藤憲彦

主査 斎藤和敏

主任 堤 絵莉子（調査担当）

範囲確認調査の結果、本堂・書院ともに旧地形の湿地を埋め立てて現在の基壇を造成していることが判明したため、その詳細を把握する必要があること、建築に伴う仮設足場の柱穴が残されている可能性があること、書院については建て替えに伴うと考えられる痕跡があることなどの所見を得た。このことから、事業実施にあたっては発掘調査が必要となるため事業者と協議し、調査の計画・積算を行った。

#### 発掘作業・整理作業（令和元年度）

平成 30 年度に行った範囲確認調査の所見および調査の計画・積算に基づき、宗教法人天徳寺の経費負担により、発掘調査・整理作業を実施した。

令和元年 6 月 3 日、本堂の調査を北西側（本な 12）から開始した。要所にサブトレントを設け、層序を確認しながら人力により本堂第 I・II・V 層を層ごとに除去し、7 月 30 日までに土間部分を除いて概ね終了した。7 月 29 日からは土間部分に着手した。土間西端（本ね 21）にサブトレントを設け土間の土層（本堂第 III 層）を確認したうえで、層序を確認しながら人力による掘削を西側から開始した。8 月 5 日には 1 号溝跡（SD01）を検出し、埋設されたかわらけを確認した。その後、本堂南北ベルト以東の土間部分については、一部バックホーを利用して本堂第 V 層を除去し、8 月 22 日までに土間部分の本堂第 VI 層面を検出した。8 月 22 日、書院の調査を北東側（書い 3）から開始した。要所にサブトレントを設け、層序を確認しながら人力により書院第 I～IV 層を層ごとに除去し、9 月 30 日までに書院 11 列以北を概ね終了した。9 月 9 日から数日かけて、本堂第 VI 層面のオルソ画像撮影を順次行うとともに、本堂東西ベルトおよび南北ベルトの断面図を作図した。9 月 30 日、書院 11 列以南について人力による掘削を開始し、書院第 V 層面の検出を概ね 10 月 7 日までに、書院第 VII 層面の検出を概ね 10 月 29 日までに終了した。10 月 5 日、保存修理事業の工事現場公開があり、それにあわせて発掘調査現場も公開した。市民 46 名の参加があった。10 月 8 日から数日かけて、書院 11 列以南の書院第 V 層面のオルソ画像撮影を行った。また、10 月 17 日から数日かけて、書院第 VII 層面のオルソ画像撮影を順次行うとともに、書院東西ベルトおよび南北ベルトの断面図を作図した。なお、本堂・書院とも、地山までの土層堆積状況を確認するため、10 月 10 日から東西ベルトおよび南北ベルトの各端点付近を順次深掘りし、断面図に追加した。10 月 31 日、発掘調査関係機材を撤収して調査を終了した。

発掘調査に引き続き、11 月 25 日から室内整理作業を開始した。出土遺物の洗浄・接合・注記・実測・写真撮影、遺構・遺物図面のデジタルトレース、図面レイアウトを令和 2 年 2 月 29 日まで、編集作業を 3 月 19 日まで行い、全工程を終了した。

#### 発掘作業・整理作業体制（令和元年度）

期 間 発掘期間 令和元年 6 月 3 日～10 月 31 日

整理期間 令和元年 11 月 25 日～令和 2 年 3 月 19 日

調査面積 約 882 m<sup>2</sup>（調査対象面積 1,057 m<sup>2</sup>）

事業主体者 宗教法人天徳寺

調査担当者 秋田市観光文化スポーツ部文化振興課

文化振興課 課長 納谷信広

文化財担当

副参事 岡部友明

主席主査 神田和彦（調査担当）

主席主査 小野隆志

主席主査 滝井田 宏 彰（調査担当・主務者）

主 査 佐 藤 憲 彦

主 査 斎 藤 和 敏

主 任 堤 紘莉子

業務受託者 池田建設株式会社東北支店

現場代理人 中村健一

協力業者 株式会社イビソク仙台支店 菅井一希、高橋貴到

調査作業員 阿久津強、越後谷智春、加藤格人、古戸由美、山石正

整理作業員 古戸由美

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

調査地である万固山天徳寺は、秋田市泉三嶽根地内に所在し、北緯  $39^{\circ} 44' 19''$ 、東経  $140^{\circ} 7' 12''$ （世界測地系：X = -28,770、Y = -61,137）である。地形分類では秋田低地にあたり、旭川右岸の上新城丘陵の南端ふもとに位置する。

### 第2節 歴史的環境

#### （1）近世の周辺遺跡

秋田市教育委員会が昭和 61 年から 63 年に作成した『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』（秋田市教育委員会 1989a）および『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書-改訂版-』（秋田市教育委員会 2002）に基づいて、万固山天徳寺周辺の近世の遺跡について概観する（挿図 1）。

万固山天徳寺から南東約 0.9 km に名勝旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園、南約 1.8 km に久保田城跡がある。

名勝旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園は、平成 24 年度に修復整備に伴う発掘調査が行われ、元禄年間（1688～1704）に整備された佐竹家別邸庭園であることが考古学的調査によっても追認され、修復整備に必要な当時の建物構造や庭園構造についての所見を得た（秋田市教育委員会 2013）。久保田城跡は、本丸、二の丸、三の丸・北の丸からなる三重構造で構成される秋田藩主佐竹氏 12 代約 270 年間の居城で、現在の千秋公園一帯がその範囲である。現在までに、公園整備や開発に伴う発掘調査を幾度か実施している（秋田市教育委員会 1989b・1992・1997・2001・2008・2009・2019、秋田県教育委員会 2006）。

#### （2）万固山天徳寺の概要

万固山天徳寺は、秋田藩主佐竹氏の菩提寺で、佐竹氏の国替えに伴って秋田に移された曹洞宗の寺院である。当初は城の南方である檜山に寺地を構えたが、寛永元年（1624）12 月に焼失したため、城の北方である現在地に移った。現在地では延宝 4 年（1676）12 月の火災で本堂はじめ多くの建物が焼失したが、長い年月をかけて諸堂は順次整えられ、書院は貞享 2 年（1685）5 月、本堂は貞享 4 年（1687）8 月に再建された。現在の本堂はこの時のものだが、書院は文化 3 年（1806）8 月に建て替えを行っている。諸堂の配置は、南から總門・山門・本堂を直線上に配し、本堂の東に書院、北に開山堂、北西に歴代藩主墓所と佐竹家靈屋が並び、藩政時代の姿を良く留めている（挿図 2）。

境内およびその周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、昭和 30 年（1955）には秋田県の史跡に指定されている。

#### [参考文献]

- 秋田市教育委員会 1989a 『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』
- 秋田市教育委員会 1989b 『久保田城跡一本丸御隅櫓跡発掘調査報告書』
- 秋田市教育委員会 1992 『久保田城跡—佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書一』
- 秋田市教育委員会 1997 『秋田市 久保田城跡一表門復元に伴う発掘調査報告書一』
- 秋田市 2000 『秋田市史 第 15 卷 美術・工芸編』

秋田市教育委員会 2001『秋田市 久保田城跡－表門復元に伴う発掘調査報告書－』

秋田市教育委員会 2002『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』

秋田県教育委員会 2006『久保田城跡・藩校明徳館跡－秋田中央道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』

秋田市教育委員会 2008『秋田市 久保田城跡－秋田駅西北地区土地区画整理事業都市計画道路千秋久保田町線に伴う三の丸堀跡発掘調査報告書－』

秋田市教育委員会 2009『秋田市 久保田城跡－千秋公園再整備計画黒門再建に伴う発掘調査報告書－』

秋田市教育委員会 2013『秋田市 名勝旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園－修復整備に伴う発掘調査概報』

秋田市教育委員会 2019『秋田市 久保田城跡－秋田和洋女子高等学校校舎建設事業に伴う発掘調査報告書－』



挿図 1 遺跡位置図



参考文献：文化財修復技術協会編『重要文化財 天徳寺 山門・総門修理工事報告書』に加筆

挿図2 天徳寺境内配置図・発掘調査位置図

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

調査区は、本堂・書院とも外周礎石列の内側とした。建物の各柱列には桁行（東西）方向に東から、い、ろ、は…、梁間（南北）方向に北から、1、2、3…の解体番付が付されているため、この解体番付をグリッドとして利用した。グリッドの呼称は、その南東隅に位置する解体番付を代表させた。なお、グリッドの南北軸は、真北方向に対して約39度56分45秒（約39.95°）東偏する。

建物が建った状態での調査であることから、建物への影響を最小限にするため、本堂については礎石や東石周りの土層を約1.5m四方残した。書院では「11列」以北では礎石等よりも深く掘り下げなかつたため礎石等の周りに土層を残さなかつたが、「11列」以南では掘削深が深くなることから、トレーナーを設定しての調査とした。また、書院の「11列」以北の東辺は水はけが悪く、素屋根内に浸透した雨水が地表面に残る状態であったため、調査区内への浸水を防ぐ目的で、「書い列」の礎石等の西側に土層を約30cm残した。また、土層観察のため、本堂では「本れ列」および「17列」に幅約1.5m、書院では「書とへと又列」および「8列」に幅約1mのベルトを残した。

埋土は、層を確認しながら層ごとに作業員による手掘りで掘削し、本堂の土間部分については一部バックホーを利用した。

検出した遺構には、以下の略記号を用いた。

S A : 柱列、S D : 溝跡、S K P : 磂石跡、S L : 焼土遺構、S M : 盛土、S P : ピット、

S S : 磂石（礎石様の大きな石）、S X : 性格不明遺構

遺物の取り上げは、グリッド名・層位等を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録して取り上げた。平面図・断面図の作成は、トータルステーションによる測量、オルソ画像のデジタルトレースを中心に行った。縮尺は、必要に応じて適宜変更した。遺構写真是35mm版のモノクロフィルムを使用し、必要に応じて35mm版のリバーサルフィルムによる撮影も行った。また、同時にデジタル一眼レフカメラでRAW形式およびJPEG形式で記録した。遺物は調査終了時で、内寸55×34×15cmのコンテナで18箱である。遺物は洗浄・接合・注記・復元作業を行い、実測図を1/1で作成した。遺物写真是デジタル一眼レフカメラを使用し、Tiff形式で記録した。

遺物の年代については『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会 2000）等を参考し、個々の遺物の年代については第8表に示した。なお、本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系、瀬戸美濃系など主要な大規模生産地（地方）に関してその生産地産の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺および地方の窯の製品も含め「系」として示した。

### 第2節 基本層序

調査区の層序の詳細は、第1～4表にまとめた。また、調査区の断面図は第2・9図に示した。調査区で確認した大まかな区分と概要を要約すると下記のとおりである。

#### （1）本堂

第I層（表土）：現況の表土である。

第I'層（玉石）：基壇の中央部に敷かれている拳大の玉石である。

第II層（近世から近代の造成土）：土間（「本ぬへね21」グリッド）を除いた基壇の縁辺部を中心にみ

られる造成土である。複数回造成した硬化面で、石灰もしくは漆喰状の成分を塗り付けている場所もある。湿気対策等のための造成と考えられる。

**第Ⅲ層（土間）**：基壇南辺（「本ぬ～ね21」グリッド）の土間である。創建時の土間は残存しておらず、数回にわたる入れ替えがあったと考えられる。

**第Ⅳ層（間知石の裏込め土）**：基壇周囲にある間知石の裏込め土である。

**第V層（創建時の造成土）**：砂に礫が混じる砂礫層で、基壇全面に敷き詰めている。層の下位は砂の粒子が粗くなる。部分的に入れ替え等があった可能性もある。

**第VI層（創建時の造成土）**：基壇の基盤となる層である。場所によって色調や混入物が異なるが、基本的には粘土を突き固め大規模な造成をした層である。色調を基準に以下のように分類した。

第VI-1層は、V層直下の層で、基本的に黄褐色を呈する。

第VI-2層は、部分的に薄く堆積する層で、黄褐色を呈する。砂質土が主体である。

第VI-3層は、黒褐色が主体の層である。

第VI-4層は、褐色と黄褐色が混じる層である。

第VI-5層は、黄褐色が主体の層である。

**第VII層（埋立土）**：湿地の埋立土である。

**第VIII層（湿地の堆積土）**：植物遺体を含む堆積土で、基壇全面に広がると考えられる。

**第IX層（地山）** 地山粘土層である。

## （2）書院

**第I層（表土）**：現況の表土である。拳大の礫がまばらにみられる。

**第II層（近世から近代の造成土）**：第IV-3層直上にある造成土で、石灰もしくは漆喰状の成分で表面が白色を呈する非常に薄い硬化面である。北東側を除く基壇全面にみられる。湿気対策等のための造成と考えられる。

**第III層（土間）**：北側および西側の縁に伴う土間である。礫石跡（SKP）の上に堆積しており、創建時の土間ではないと考えられる。なお、「中の間」・「次の間」西側の土間は攪乱が激しく、明確に確認できなかった。

**第IV層（近世の造成土）**：基壇全面に広がる造成土である。北東側とそれ以外で色調や混入物が異なる。文化3年（1806）の建て替えに伴うものである。

**第V層（近世の造成土）**：基壇東辺および南辺にみられる造成土である。文化3年（1806）の建て替えに伴い平坦面を拡張した際の埋立土で、以下のように分類した。

第V-1層は、基壇南辺を拡張した層である。

第V-2層は、基壇東辺を拡張した層である。

**第V'層（炭化物層）**：第VI・VI'層直上の炭化物層である。「書ろ11～15サブトレーナー」、「書へ12～16サブトレーナー」、「書と又～本ぬ15サブトレーナー」で確認した。一部で層状に確認できるが、大部分は層を形成しない程度に炭化物が残存する。

**第VI層（創建時の整地層）**：「書ろ11～15サブトレーナー」で確認した整地層である。直径10cm程度の礫が残存する。創建時に前庭部的な機能を有した場所と考えられる。

**第VI'層（創建時の整地層）**：「書へ12～16サブトレーナー」および「書と又～本ぬ15サブトレーナー」で確認した整地層と考えられる層である。第VI層よりも小さな礫（直径5cm以内程度）が砂質土とともに

薄く堆積する。

**第VII層（創建時の造成土）**：基壇の基盤となる層で、粘土を突き固め大規模な造成をしている。色調を基準に以下のように分類した。

第VII-1層は、黄褐色が主体の層である。

第VII-2層は、褐色と黄褐色が混じる層である。

**第VIII層（埋立土）**：湿地の埋立土である。

**第IX層（地山）**：地山粘土層である。

### 第3節 発見した遺構と遺物

#### （1）本堂

本堂では柱列13列（S A01～13）、溝跡2条（S D01・02）、焼土跡21基（S L01～21）、ピット33基（S P01～33）、性格不明遺構18基（S X01～18）を検出した（第5～7表）。出土遺物は、陶磁器、かわらけ、金属製品、錢貨などである。以下に、主なものを各層ごとに記述する。

##### ①本堂第II層について（第3図）

本堂第II層は、土間（「本ぬ～ね21」グリッド）を除いた本堂縁辺部で、本堂第I'層がない範囲にみられる硬化面である。石灰もしくは漆喰状の成分で表面が白色を呈する硬化面（本堂第II-2-1層）が大部分を占め、直下には炭化物や木屑片が混じる層（本堂第II-2-2層）がある。また、北西側では、本堂第II-2-1層を覆うように同様の硬化面（本堂第II-1-1層）と、その直下に炭化物や木屑片が混じる層（本堂第II-1-2・II-1-3層）が重なる。本堂II-1-3層にはプラスチック片が混じる。また、東辺では本堂II-2-1層の下にも硬化面（本堂II-4層）がみられる。検出した遺構は性格不明遺構3基（S X01～03）である。出土遺物は、本堂第II層および遺構内から、近世から近代の陶磁器、鉄釘・鉢などの金属製品、錢貨である。

##### ②本堂第III層面検出遺構と出土遺物（第4図）

本堂第III層は、本堂南辺部（「本ぬ～ね21」グリッド）の土間である。ブロック状の粘土を敷きつめ、その上面を叩いた土間が全面にみられる（本堂第III-2層）。「本た21」グリッド以西では、本堂第III-2層の上に更に土間を敷いており（本堂第III-1層）、他よりも若干高くなっている。また、「本た21」グリッド以西では、本堂第III-2層の下に古い土間がみられた（本堂第III-3層）。また、本堂第III層と本堂第V層の間には、本堂第V層が固まったような砂礫層（本堂第III-4層）があり、その範囲は本堂第III-2層よりも若干北側に広がる。検出した遺構は溝跡1条（S D01）、焼土遺構21基（S L01～21）、性格不明遺構2基（S X04・05）である。出土遺物は、本堂第III層および遺構内から、近世陶磁器、かわらけ、鉄釘・鉢・煙管などの金属製品、錢貨である。

#### 性格不明遺構

##### 5号性格不明遺構（S X05）（第7図、図版6）

「本た21」グリッドの本堂第III-4層面で検出した、方形に石が組まれた遺構である。石を含めた平面規模は、長軸28.6cm、短軸27.3cmで、検出面からの深さは10.6cmである。石組の内寸は、長軸16.6cm、短軸16.3cmである。石は長軸23cm、短軸11cm、厚み6cmが3点、長軸17.5cm、短軸7cm、厚み5cmが1点である。なお、本堂第III-4層の範囲は本遺構にかかっているため、南側の検出面は本堂第III-4層、

北側の検出面は本堂第V層になる。石の掘り方は確認できなかった。石に囲まれた内側の埋土は表土（本堂第I-1層）である。

## 溝跡

### 1号溝跡（S D01）（第7図、図版6）

「本ぬ～ね21」グリッドの本堂第III-4層面で検出した、北西方向に延びる溝跡である。「本れ21」グリッドで一度途切れるため2条の溝跡になるが、埋土や出土遺物などから推定される遺構の性格から同一の遺構とする。平面規模は、「本ぬ～れ21」グリッドまでの長さが推定17.3m、「本れ～ね21」グリッドまでの長さが5.75m、最大幅43.0cm、最小幅25.7cmである。軸方向は、西から北へ約50°振れている。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは9.5～22.4cmである。本堂第V層を掘り込む溝で、「本た21」グリッド以東では本堂第III-2層、以西では本堂第III-3に覆われており、埋土は砂質土である。埋土および底面からかわらけが出土した。

## 本堂第III層出土遺物（第19図、図版13）

### [III-1層]

1は肥前系磁器の染付碗である。外面にコンニャク印判による文様を染め付けている。

### [III-2層]

2は肥前系陶器の灰釉碗である。高台付近は無釉で、見込みに胎土目痕が認められる。3は肥前系磁器の染付皿である。外面が青磁で、見込みに文様を染め付けている。蛇ノ目凹型高台である。4は肥前系磁器の染付瓶である。外面に一重網目文を染め付けている。

### [III-3層]

5は肥前系磁器の染付碗である。外面に草花文を染め付けている。

### [III-4層]

6は瀬戸美濃系陶器の碗である。内外面に灰釉を施している。釉は灰白色を呈する。

## 本堂第III層面検出遺構内出土遺物（第19図、図版13）

### [S D01]

7～10は型押し成形の非ロクロ製手づくねのかわらけである。7は口縁部の外面に横方向のナデがみられる。口縁部には煤が付着した灯芯痕が12か所認められる。8は外面は口縁部に横方向、内面は不定方向のナデがみられる。口縁部には煤が付着した灯芯痕が12か所認められる。9は内外面とも口縁部に横方向、それ以外に不定方向のナデがみられる。口縁部には煤が付着した灯芯痕が6か所、見込みには灯芯を置いたと考えられる痕跡がある。10は内外面に煤状の炭化物が付着しており、特に口縁部が顕著である。

## ③本堂第IV層について

本堂第IV層は、本堂周囲にある間知石の裏込め土である。本堂第I-2-1・I-2-2層を除去後に検

出した。φ 2～3cm 程度の円礫やφ 15cm 程度の角礫が多量に混じる層（本堂第IV-2層）、本堂第V層をせき止めるように堆積する層（本堂第IV-1層）がみられる。検出した遺構はない。出土遺物は、近世陶磁器、釘などの金属製品、錢貨である。

#### ④本堂第V層面検出遺構と出土遺物（第5図）

本堂第V層は、本堂全城にみられる砂と礫が混じり合った砂礫層である。本堂第I・I'・II・III層を除去後に検出した。層の上位にはφ 5cm 程度の礫が多量に含まれるが、下位では礫が少くなり砂の粒子が粗くなる。検出した遺構は柱列13列（SA01～13、現本堂の木階の骨組みを立てた跡で掘り方はない）、性格不明遺構12基（SX06～17）である。出土遺物は、本堂第V層および遺構内から、近世陶磁器、礫、鐵釘・銛・煙管などの金属製品、錢貨である。

#### 性格不明遺構

##### 10・11号性格不明遺構（SX10・11）（第7図、図版7）

「本る19」グリッドの本堂第V層面で検出した性格不明遺構である。SX11はSX10に切られている。SX10の平面形は不定形で、長軸2.22m、短軸1.51m、検出面からの深さは18.7cmである。埋土に炭化物・灰（一部纖維が残る）が混じる。出土遺物は、近世陶磁器、礫、鐵釘などの金属製品、錢貨である。SX11の平面形は梢円に近い不定形と推測され、長軸推定77.8cm、短軸70.2cm、検出面からの深さは7.4cmである。出土遺物は、近世陶磁器である。

##### 12号性格不明遺構（SX12）（第7図、図版7）

「本ぬ18」グリッドの本堂第V層面で検出した性格不明遺構である。平面形は隅丸方形で、長軸279.2cm、短軸推定199.0cm、検出面からの深さは33.6cmである。中央部が一段深くなっている。底面は平らである。埋土は黒褐色で、炭化物が若干混じる。出土遺物は、近世から近代の陶磁器、鐵釘などの金属製品である。

#### 本堂第V層出土遺物（第19図、図版13）

11は中国産磁器の染付碗である。外面に草花文を染め付けており、虫食いが認められる。12は肥前系磁器の染付碗である。外面に魚の文様を染め付けている。

#### ⑤本堂第VI層面検出遺構と出土遺物（第6図）

本堂第VI層は基壇の基盤となる層で、褐・灰黄・浅黄色などを呈する粘土と粘土ブロックが混じる造成土を突き固めている。本堂第V層を除去後に検出した。本堂北西部・北東部では、直上に本堂第V層がほとんどみられない。検出した遺構は、溝跡1条（SD02）、ピット33基（SP01～33）、性格不明遺構1基（SX18）である。出土遺物は、本堂第VI層および遺構内から、近世陶磁器、金属製品である。なお、現在の建物に伴う礎石の下に確認できる根石は、この層を掘り込んで充填している。

#### 溝跡

##### 2号溝跡（SD02）（第8図、図版8）

「本ぬ～を12」・「書り12」グリッドの本堂第VI-1-1層面で検出した、北西方向に延びる溝跡であ

る。平面規模は、長さ 13.67m、最大幅 46.5cm、最小幅 27.4cm である。軸方向は、西から北へ約 49° 振れている。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは 7.2~14.0cm である。埋土は本堂第V層と類似した砂礫層である。出土遺物は、銅製の金属製品である。

#### ピット

##### 7~9号ピット (S P07~09) (第8図、図版8)

「本か 16」グリッドの本堂第VI-1~9層面で検出したピットである。S P07・09 は S P08 にそれぞれ切られており、S P07・09 は切り合っていない。S P07 の平面形は楕円形で、長軸 43.7cm、短軸推定 37.6cm、検出面からの深さは 5.5cm である。底面は概ね平らである。S P08 の平面形は楕円形で、長軸 27.0cm、短軸推定 17.6cm、検出面からの深さは 4.6cm である。S P09 の平面形は楕円形で、長軸推定 42.4cm、短軸 39.0cm、検出面からの深さは 4.2cm である。底面は概ね平らである。埋土は3基とも同様で、 $\phi$  1 cm 程度の粘土ブロックが混じる黄褐色土である。3基とも出土遺物はない。

##### 10~12号ピット (S P10~12) (第8図、図版8)

「本か 16」グリッドの本堂第VI-1~9層面で検出したピットである。S P10・12 は S P11 にそれぞれ切られており、S P10・12 は切り合っていない。S P10 の平面形は楕円形で、長軸 51.9cm、短軸 41.1cm、検出面からの深さは 13.1cm である。北側がやや深い。S P11 の平面形は楕円形で、長軸 40.7cm、短軸推定 25.3cm、検出面からの深さは 8.7cm である。底面は平らである。S P12 の平面形は楕円形で、長軸推定 28.8cm、短軸 23.6cm、検出面からの深さは 2.5cm である。底面は平らである。埋土は3基とも同様で、 $\phi$  1~3 cm 程度の粘土ブロックが混じるにぶい黄褐色土である。3基とも出土遺物はない。

##### 27号ピット (S P27) (第8図、図版8)

「本れ 21」グリッドの本堂第VI-1~2層面で検出したピットである。平面形は円形で、径が約 40.0cm、検出面からの深さは 30.6cm である。底面は平らである。埋土は砂質で、粘土ブロックと $\phi$  1 cm 程度の礫が混じる。出土遺物はない。

##### 28号ピット (S P28) (第8図、図版8)

「本れ 21」グリッドの本堂第VI-1~4層面で検出したピットである。平面形は円形で、径が約 42.5cm、検出面からの深さは 6.0cm である。底面は平らである。埋土は砂質で、粘土ブロックと $\phi$  1~3 cm 程度の礫が混じる。出土遺物はない。

##### 29号ピット (S P29) (第8図、図版8・9)

「本れ 21」グリッドの本堂第VI-1~2層面で検出したピットである。平面形は楕円形で、長軸 45.5cm、短軸 32.3cm、検出面からの深さは 27.0cm である。底面は平らである。埋土は砂質で、粘土ブロックと $\phi$  2~3 cm 程度の礫が混じる。出土遺物はない。

#### 性格不明遺構

##### 18号性格不明遺構 (S X18) (第8図、図版9)

「本よ 20・21」グリッドの本堂第VI-1~3層面で検出した性格不明遺構である。平面形は楕円形で、

長軸 83.7cm、短軸 54.9cm、検出面からの深さは 12.9cm である。北側の底面は平らで、南側の底面は凹凸が多い。埋土は砂質で、粘土ブロックと φ 1cm 程度の礫が混じる。出土遺物はない。

#### 本堂第VI層出土遺物（第 19・20 図、図版 13・14）

##### [礎石「本た 18」の根石中]

13 は肥前系陶器の端反碗である。内外面に灰釉を施している。釉は灰黄色を呈する。

##### [VI-3-3 層]

14 は産地不明の無釉の擂鉢である。

##### [VI-3-6 層]

15 は肥前系陶器の灰釉碗である。釉は灰黄色を呈する。疊付は無釉である。16 は中国産陶器の端反碗である。内外面に灰釉を施している。釉は乳白色を呈する。外面に蓮弁文が認められる。17 は肥前系陶器の天目茶碗である。内面に鉄釉が施されており、外面には部分的に釉が流れている。裏底には兜巾が認められる。18 は産地不明の陶器の小壺である。内外面に灰釉を施している。釉は浅黄橙色を呈する。19 は肥前系磁器の染付碗である。外面に文様を染め付けている。裏底には兜巾が認められる。20 は中国産磁器の小杯である。

##### [VI-4-9 層]

21 は肥前系磁器の瓶である。外面に草花文を染め付けている。内面は無釉である。

##### [その他]

発掘調査終了後の工事立会中、須弥壇の南側（「本れ 16」礎石から西に約 130 cm・南に約 40 cm、本堂第 I' 層面からの深さ約 70 cm）で染付蓋・壺（22）が出土した。

22-1 は肥前系磁器の染付蓋である。外面に草花文を染め付けている。文様は 3 つに分けられた区画内に描かれている。22-2 は肥前系磁器の染付壺である。外面の頸部に柳葉文、胴部に草花文、高台付近に鋸歯文を染め付けている。胴部の草花文は 3 つに分けられた区画内に描かれている。

## （2）書院

書院では、礎石跡 16 基（SKP01～16）、盛土 1 基（SM01）、ピット 16 基（SP34～49）、礎石様の大きな石 8 基（SS01～08、このうち SS05～08 は工事立会中に検出）、性格不明遺構 17 基（SX19～35）を検出した（第 5～7 表）。出土遺物は、陶磁器、木製品、金属製品、錢貨などである。以下に、主なものを各層ごとに記述する。

##### ①書院第III層面検出遺構と出土遺物（第 10 図）

書院第 III 層は、書院北側および西側の縁に伴う土間である。検出した遺構は、ピット 1 基（SP34）、性格不明遺構 3 基（SX19～21）である。出土遺物は、書院第 III 層および遺構内から、近世陶磁器、金属製品である。

## 書院第III層出土遺物（第20図、図版14）

### [III-1層]

23は肥前系磁器の染付碗である。外面に菊花文、内面に四方攢文を染め付けている。

## ②書院第IV層面検出遺構と出土遺物（第10・11図）

書院第IV層は、書院第I・II層を除去後にみられる近世の造成土である。北東部は暗褐色土に粘土ブロックが混じる層（第IV-2層）で、それ以外はφ5cm程度の礫が混じるぶい黄褐色土の層（書院第IV-3層）が主体である。検出した遺構は、盛土1基（SM01）、ピット6基（S P35～40）、性格不明遺構5基（S X22～26）である。出土遺物は、書院第IV層および遺構内から、近世陶磁器、釘・煙管などの金属製品、錢貨である。

### 盛土

#### 1号盛土（SM01）（第14図、図版10）

「書～13」グリッドの書院第IV-3層面で検出した盛土（「広間」の炉に伴う土台）である。平面形は隅丸方形で、長軸279.3cm、短軸125.8cm、高さ32.9cmである。頭頂部の幅は、東西58.7cm、南北32.9cmである。明黄褐色の埋土にφ2～4cm程度の礫、φ5cm程度の粘土ブロックが混じる。また、堰板の一部が出土し、それを固定するための杭跡（P1～5）も5基検出した。杭跡の平面形は、P1・3が梢円形、P2・4・5が円形である。出土遺物は、近世から近代の陶磁器が3点である。

### 性格不明遺構

#### 24号性格不明遺構（S X24）（第14図、図版10）

「書は9」グリッドの書院第IV-6層面で検出した性格不明遺構である。平面形は帯状で、長軸146.1cm、短軸33.9cm、検出面からの深さ17.0cmである。埋土は砂質で、φ1～10cm程度の礫が密に混じる。出土遺物はない。

## 書院第IV層出土遺物（第20図、図版14）

### [IV-2層]

24は肥前系陶器の鉢である。内面に銅線釉を施している。25は肥前系磁器の碗である。外面に文様を染め付けている。裏底には兜巾が認められる。26は型押し成形の非ロクロ製手づくねのかわらけである。内面に墨書きが認められる。

### [IV-3層]

27は瀬戸美濃系磁器の碗である。外面と見込みに文様を染め付けている。

### [IV-4層]

28は肥前系磁器の染付碗である。外面に梵字文を染め付けている。29は肥前系磁器の染付碗である。外面に二重網目文、内面に一重網目文を染め付けている。

#### [IV-6層]

30は肥前系陶器の溝縁皿である。内外面に灰釉を施している。釉は灰黄色を呈する。31は肥前系磁器の染付碗である。内面に一重網目文、外面に二重網目文を染め付けている。

#### ③書院第V層について（第12・13図）

書院第V層は、書院の東辺・南辺にみられる造成土である。書院第IV層を除去後に検出した。書院第V-1層は「11列」以南の造成土で、φ3cm程度の粘土ブロックが密に混じる層（書院第V-1-1層）と、その下層にある粘土ブロック主体の層（書院第V-1-2層）が主体である。なお、書院第V-1層の直下には、一部層になって残存する炭化物層（書院第V'層）がある。書院第V-2層は「書ろへは列」以東の造成土で、粘土ブロックと炭化物が混じる層が主体である。検出遺構はない。出土遺物は、近世陶磁器、釘・煙管などの金属製品、銭貨である。

#### 書院第V層出土遺物（第20・21図、図版14・15）

##### [V-1-1層]

32は肥前系陶器の鉢もしくは壺である。外面に刷毛目装飾が認められる。33は肥前系磁器の染付碗である。内外面に冰裂菊花文を染め付けている。

##### [V-1-2層]

34は肥前系磁器の染付碗である。外面に一重網目文を染め付けている。35は肥前系磁器の染付輪花皿である。内面に花唐草文、裏文様に唐草文を染め付けている。

##### [V-1-4層]

36は肥前系磁器の染付皿である。見込みに人物を染め付けている。蛇ノ目回型高台である。

##### [V-1-6層]

37は肥前系磁器の染付碗である。内面に一重網目文、外面に二重網目文、見込みに菊花文を染め付けている。裏底に二重方形型枠内に「渦福」の銘がある。

##### [V-2-2層]

38・39は肥前系磁器の蕎麦猪口である。38は外面に文様、口縁部の内面に四方襷文を染め付けている。39は口縁部の外面に四方襷文、その下にコンニャク印判の草花文を染め付けている。

##### [V-2-5層]

40は肥前系青磁の仏花瓶である。外面に釉を施している。内面は口縁部付近まで釉を施し、頸部より下は部分的に釉が流れている。頸部には耳が1対あり、人面を呈する。

##### [V'層]

41は肥前系磁器の碗である。内面に一重網目文、外面に二重網目文を染め付けている。42は肥前系磁器の皿である。内面に花唐草文、裏文様に唐草文、見込みにコンニャク印判の五弁花を染め付けている。

裏底に「大明年製」銘がある。

#### ④書院第VI層面検出遺構と出土遺物（第12図）

書院第VI層は、「書11列」以南で確認した整地層で、書院第V-1・V'層を除去後に検出した。書院第VI層は、「書ろ13~15サブトレント」でみられるφ10cm程度の礫が主体の層である。また、書院第VI'層は、「書~12~16サブトレント」・「書と又~本ぬ15サブトレント」でみられる褐色の砂礫層である。検出した遺構は、性格不明遺構3基（SX27~29）である。出土遺物は、書院第VI層および遺構内から、近世陶磁器、金属製品、錢貨である。

#### 性格不明遺構

##### 27号性格不明遺構（SX27）（第15図、図版12）

「書~15・16」グリッドの書院第VI'-1層面で検出した性格不明遺構である。平面形は隅丸方形で、長軸129.4cm、短軸推定109.4cm、検出面からの深さ9.6cmである。埋土は黒褐色土で、多量の炭化物・数点の礫（φ20cm程度）が混じる。礫には割れたものもみられる。また、礫の下からは僅かに焼土を検出した。出土遺物は、近世陶磁器、金属製品である。

#### 書院第VI層出土遺物（第21図、図版15）

43は肥前系陶器の瓶である。内外面に灰釉を施している。釉は灰白色を呈する。疊付に胎土目痕が認められる。44は肥前系磁器の染付碗である。内外面に水裂菊花文を染め付けている。

#### ⑤書院第VII層面検出遺構と出土遺物（第13図）

書院第VII層は基壇の基盤となる層で、暗褐色・褐色・黄褐色などを呈する粘土と粘土ブロックが混じる造成土を突き固めている。書院第IV・V・VI層を除去後に検出した。検出した遺構は、礎石跡16基（SKP01~16）、ピット9基（SP41~49）、礎石様の大きな石8基（SS01~08）、性格不明遺構5基（SX30~34）である。出土遺物は、書院第VII層直上および遺構内から、近世陶磁器、金属製品、錢貨である。

#### 礎石跡

##### 7号礎石跡（SKP07）（第16図、図版12）

「書は5」グリッドの書院第VII層面で検出した礎石跡である。平面形は梢円形と推定でき、長軸64.8cm、短軸推定41.6cm、検出面からの深さ22.2cmである。底面は平らである。φ3~9cm程度の礫が主体で、暗褐色土が混じる。出土遺物はない。

##### 15号礎石跡（SKP15）（第16図、図版12）

「書ち8」グリッドの書院第VII層面で検出した礎石跡である。平面形は梢円で、長軸59.2cm、短軸47.7cm、検出面からの深さ14.6cmである。底面は概ね平らで、中央部がやや窪んでいる。φ3~4cm程度の礫が主体で、褐色土が混じる。底面から近世磁器が1点出土した。

## 書院第VII層面検出遺構内出土遺物（第21図、図版15）

[SKP15]

45は肥前系磁器の染付碗である。外面に草花文、見込みに松竹梅を染め付けている。

### 礎石

#### 3号礎石（SS03）（第16図、図版12）

「書と又8」グリッドの書院第VII層面で検出した礎石である。長軸49.4cm、短軸30.4cm、厚み11.1cmである。上面には、墨で引かれた基準線や、明確ではないものの柱の痕跡と思われる跡が残っている。掘り方や根石は確認できなかった。

### 第4節 磂石と東石の据え方

現在の建物に伴う礎石・東石について、本堂・書院ともに数か所ずつで底部の様相を確認した。以下に、概要を記述する。

#### ①本堂（第17図、図版9）

礎石は、「本ぬ20」、「本た18」、「本つ18」で確認した。いずれも本堂第VI層を掘り込んで根石を充填し、その上に礎石を据えている。東石は、「本よ18」、「本れ18」で確認した。いずれも本堂第V層中に据えている。

#### ②書院（第18図、図版12）

礎石は、「書ち5又」、「書へ11」で確認した。「書ち5又」では、書院第VII層を掘り込んで根石を充填し、その上に礎石を据えている。「書へ11」では書院第IV-6層を掘り込んで根石を充填し、その上に礎石を据えている。東石は、「書へ9」で確認した。書院第VI-6層中に据えている。

第1表 土層注記一覧(1)

## 本堂

層名	性質	色調	粘性	しまり	備考
I-1		灰黄褐色砂質土(10YR5/2)	なし	なし	
I-2-1 表土		灰黄褐色砂質土(10YR4/2)に円礫(φ～5cm)が混じる	なし	なし	
		にぶい黄色粘土(2.5Y6/3)	なし	非常に強い	
		φ10cm前後の玉石			
II-1-1		灰黄褐色土(10YR4/2)	なし	あり	石灰もしくは漆喰を含む硬化面
II-1-2		にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)に炭化物(φ5mm)が若干混じる	なし	あり	
II-1-3		暗褐色シルト(7.5YR3/4)に炭化物や木片が混じる	なし	なし	
II-2-1 近代の 造成土		灰黄褐色土(10YR5/2)に炭化物が若干混じる	なし	あり	石灰もしくは漆喰を含む硬化面
		にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)に炭化物や木片が混じる	なし	あり	
II-3		にぶい黄褐色砂質土(10YR6/2)	なし	あり	硬化面
II-4		褐色砂質土(10YR4/4)に橙色粘土ブロック(10YR6/8、φ1～2cm)・淡黄色粘土ブロック(2.5Y8/3、φ1～2cm)が混じる	なし	あり	硬化面
II'	近世から 近代の造 成土	黒褐色土(10YR3/2)に炭化物(φ5mm)が混じる	あり	あり	
III-1		にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)ににぶい黄褐色粘土ブロック(10YR7/3、φ3cm程度)、スサナの繊維が若干混じる	なし	非常に強い	
III-2	土間	にぶい黄色シルト(2.5YR6/4)に黄色粘土ブロック(2.5YR7/8、φ1cm)が混じる	なし	非常に強い	
III-3		浅黄色シルト(2.5YR8/4)・明黃褐色土(2.5Y7/6)	なし	非常に強い	
III-4		にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4)	なし	非常に強い	
IV-1	開知石 の裏込 め土	暗褐色粘土質土(10YR3/3)に明黄褐色粘土ブロック(10YR6/8、φ1～3cm)・灰白色(2.5Y8/2)粘土ブロック(φ1～3cm)が混じる	あり	あり	
IV-2		にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)、暗褐色土(10YR3/3)に円礫(φ2～3cm)・角礫(φ15cm前後)が混じる	なし	なし	
V	創建時の 造成土	にぶい黄燈色砂(10YR6/4)と礫(φ～5cm)の層	なし	なし	
VI-1-1		暗褐色粘土質土(10YR3/4)ににぶい黄褐色粘土ブロック(10YR7/4、φ2～4cm)・明黄褐色粘土ブロック(10YR6/6、φ2～4cm)が混じる	あり	あり	
VI-1-2		黒褐色土(10YR3/1)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～8cm)が非常に密に混じる	あり	非常に強い	
VI-1-3		にぶい黄褐色土(10YR5/3)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3、φ～5cm)が密に混じる	ややあ り	非常に強い	
VI-1-4		黄褐色粘土質土(2.5Y5/6)に灰黄色粘土ブロック(2.5Y7/2、φ～2cm)・にぶい黄褐色粘土ブロック(10YR4/3、φ～1cm)が密に混じる	あり	あり	
VI-1-5	創建時 の造成 土	黒褐色土(10YR3/1)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ10～15cm)が非常に密に混じる	あり	非常に強い	
VI-1-6		褐色粘土質土(10YR4/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～3cm)が非常に密に混じる	あり	あり	
VI-1-7		褐色粘土(10YR4/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3、φ～1cm)・明褐色粘土粒(7.5YR5/8、φ5mm)が密に混じる	あり	あり	
VI-1-8		にぶい黄褐色土(10YR4/3)・	あり	あり	
VI-1-9		にぶい黄燈色粘質土(10YR6/3)	なし	あり	
VI-1-10		にぶい黄褐色土(10YR5/3)・	なし	非常に強い	直下に粒子の粗い砂が混じる
VI-2-1		にぶい黄燈色粘質土(10YR6/3)	あり	あり	
VI-2-2		にぶい黄褐色土(10YR4/3)	なし	あり	
VI-2-3		にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)	なし	あり	
VI-2-4		暗褐色砂(10YR3/4)に礫(φ～3cm)が混じる	あり	非常に強い	
		灰黄褐色粘土(10YR5/2)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3、φ～5cm)が混じる	あり	非常に強い	

第2表 土層注記一覧 (2)

## 本堂

層名	性質	色調	粘性	しまり	備考
VI-2-5		にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)に2.5Y7/3灰黃色粘土ブロック(φ~2cm)が密に混じる	なし	非常に強い	
VI-2-6		にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)	なし	非常に強い	
VI-3-1		にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)ににぶい黄色粘土ブロック(2.5Y6/3, φ~2cm)が密に混じる	あり	あり	
VI-3-2		暗褐色土(10YR3/3)に にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)ににぶい黄色粘土ブロック(2.5Y5/4, φ~2cm)密に混じる	あり	あり	
VI-3-3		黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~3cm)が非常に密に混じる	あり	非常に強い	
VI-3-4		黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~3~15cm)が非常に密に混じる	あり	非常に強い	
VI-3-5		にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)・ 黒褐色粘質土(10YR2/2)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~5cm)が混じる	あり	非常に強い	
VI-3-6		灰黄褐色粘質土(10YR4/2)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~3cm)・炭化物(φ~1cm)が混じる	あり	非常に強い	
VI-3-7		黒褐色粘質土(10YR3/2)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~3cm)、炭化物が混じる	ややあり	あり	
VI-3-8		黒褐色土(10YR2/3)ににぶい黄褐色粘土ブロック(10YR5/4, φ~3cm)が密に混じる	あり	あり	
VI-3-9		黒褐色土(10YR2/1)・黒褐色土(10YR2/3)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~5cm)が混じる	あり	あり	
VI-3-10		黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~1cm)非常に密に混じる	あり	あり	
VI-3-11	創建時 の造成 土	黒褐色土(10YR2/2)	なし	非常に強い	
VI-3-12		黒褐色土(10YR2/3)・褐色粘質土(10YR4/4)に 浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~3cm)が密に混じる	あり	ややあり	
VI-4-1		にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~2cm)・黄褐色粘土粒(10YR5/8, φ~5mm)、炭化物(φ~1cm)が混じる	なし	非常に強い	
VI-4-2		灰黄褐色土(10YR4/2)に灰黄色粘土ブロック(2.5Y6/2, φ~5cm)・にぶい黄色粘土ブロック(2.5Y6/3, φ~5cm)が非常に密に混じる	なし	非常に強い	
VI-4-3		灰黄褐色土(10YR4/2)に灰黄色粘土ブロック(2.5Y6/2, φ~2cm)が混じる	なし	非常に強い	
VI-4-4		にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/3, φ~3cm)が混じる	あり	非常に強い	
VI-4-5		褐色粘土(10YR4/4)に灰黄色粘土ブロック(2.5Y7/2, φ~5cm)が非常に密に混じる	あり	非常に強い	
VI-4-6		暗褐色土(10YR3/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4, φ~5cm)が非常に密に混じる	あり	ややあり	
VI-4-7		青灰色粘土(5BG5/1)	あり	ややあり	
VI-4-8		褐色土(10YR4/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y8/2, φ~2~5cm)が密に、炭化物(φ1cm)が若干混じる	ややあり	あり	
VI-4-9		にぶい黄褐色土(10YR4/3)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y8/2, φ~2~3cm)・明褐色粘土ブロック(7.5YR5/8, φ~1cm)・炭化物(φ5mm)が混じる	あり	ややなし	
VI-5-1		灰黄色粘土(2.5Y7/2)に灰黄色粘土ブロック(2.5Y6/2, φ~5cm)が混じる	ややあり	非常に強い	
VI-5-2		にぶい黄色粘土(2.5Y6/3)	なし	非常に強い	
VI-5-3		暗灰黄色粘土ブロック(2.5Y5/2, φ~20cm)が主体の層	なし	非常に強い	
VII-1		黒褐色粘質土(10YR2/2)にオリーブ灰色粘土ブロック(2.5GY6/1, φ~20cm)が混じる	非常に強い	なし	
VII-2	理立土	オリーブ灰色粘土(2.5GY5/1)に青灰色粘土ブロック(5BG6/1, φ~5cm)が非常に密に混じる	非常に強い	なし	

第3表 土層注記一覧 (3)

## 本堂

層名	性質	色調	粘性	しまり	備考
VII-3		黒色シルト(10YR2/1)	非常に 強い	なし	
VII-4		褐灰色粘質土(10YR4/1)に青灰色粘土ブロック(5BG6/1, φ~2cm)が密に混じる	非常に 強い	ややなし	
VII-5	埋立土	褐灰色粘質土(10YR4/1)にオリーブ灰色粘土ブロック(5GV6/1, φ~5cm)が混じる	非常に 強い	なし	
VII-6		灰褐色砂質土(10YR5/2)	なし	あり	
VII-7		青灰色シルト(5BG5/1)に角ばった黄褐色粘土ブロック(2.5V5/4, φ~10cm)が混じる	なし	あり	
VIII	湿地の堆積土	黒褐色シルト(10YR3/1)に植物遺体が若干混じる	非常に 強い	なし	
IX	地山	明オリーブ灰色粘土(2.5G7/1)	あり	非常に強い	

## 畫院

層名	性質	色調	粘性	しまり	備考
I-1		灰褐色砂質土(10YR5/2)	なし	なし	拳大の礫がまばらにみられる
I-2	表土	暗褐色土(10YR3/3)に褐色粘土粒(7.5IR4/6, φ~5mm)・にぶい黄色粘土ブロック(2.5V6/4, φ~1cm)が混じる	ややあり	ややなし	
I-3		褐灰色粘質土(10YR4/1)	あり	あり	
II	近世から 近代の造 成土	にぶい黄褐色砂質土(2.5Y6/3)	なし	あり	IV-3層直上に非常に薄く堆積する。石灰もしくは漆塗を含む硬化面。
III-1		明褐色砂質土(7.5YR5/6)	なし	ややあり	
III-2	土間	褐色粘質土(10YR4/4)ににぶい黄褐色粘土ブロック(10YR7/3, φ~1cm)・礫(φ~5cm)が混じる	あり	あり	
III-3		褐色粘質土(10YR4/6)	あり	ややなし	
IV-1		にぶい黄褐色土(10YR5/3)に灰白色粘土ブロック(10YR8/2, φ~5mm)・礫(φ~3cm)が混じる	ややあり	ややあり	
IV-2		暗褐色土(10YR3/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5V7/4, φ~5cm)が混じる	ややあり	ややあり	
IV-3		にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)に礫(φ~5cm)が混じる	なし	あり	
IV-4	近世の 造成土	暗褐色粘質土(10YR3/4)ににぶい黄褐色粘土ブロック(2.5V6/4, φ~1cm)・礫(φ~5cm)が混じる	なし	あり	
IV-5		黄褐色粘土(2.5V5/6)・にぶい黄色粘土(2.5V6/4)	あり	なし	
IV-6		暗褐色粘質土(10YR3/3)に暗褐色砂質土(10YR3/3)・にぶい黄褐色粘土ブロック(2.5V6/3, φ~2cm)・炭化物(φ~1cm)が混じる	ややあり	ややあり	
IV-7		褐色土(10YR4/4)に黒褐色土(10YR2/2)が混じる	ややなし	ややなし	
V-1-1		暗褐色粘土(10YR3/3)ににぶい黄色粘土ブロック(2.5V6/3, φ~3cm)が非常に密に混じる	あり	あり	
V-1-2		黄褐色粘土ブロック(10YR4/2, φ~5~20cm)が主体	なし	あり	
V-1-3		褐色粘質土(10YR4/6)に浅黄色粘土ブロック(2.5V7/4, φ~2cm)が混じる	あり	あり	
V-1-4	近世の 造成土	黒褐色粘質土(10YR3/2)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6, φ~2cm)・炭化物(φ~5mm)が混じる	あり	非常に強い	
V-1-5		黄褐色粘土ブロック(10YR4/2, φ~5~20cm)が主体	なし	あり	
V-1-6		褐色粘質土(10YR4/4)に褐色砂(10YR4/4)・円礫(φ~2cm)・炭化物(φ~1cm)・浅黄色粘土ブロック(2.5V7/4, φ~2cm)・炭化物(φ~5mm)が混じる	あり	あり	
V-1-7		暗褐色粘質土(10YR3/3)に褐色砂(7.5YR4/6)・暗褐色砂(10YR3/3)・炭化物(φ~5mm)が混じる	あり	なし	

第4表 土層注記一覧 (4)

書院	層名	性質	色調	粘性	しまり	備考
V-2-1			にぶい黄褐色土(10YR4/3)ににぶい黄橙色粘土ブロック(10YR6/4、φ～1cm)・礫(φ～3cm)が混じる	あり	あり	
			暗褐色土(10YR3/4)に・にぶい黄褐色粘土ブロック(2.5Y6/3、φ2～3cm)・炭化物(φ～1cm)が混じる	あり	あり	
近世の造成土	V-2-3	黒色粘質土(10YR2/1)	非常に強い	ややあり		
	V-2-4	灰黄褐色粘土(10YR4/2)	非常に強い	あり		
	V-2-5	にぶい黄橙色粘土(10YR7/2、φ～5cm)が主体	あり	あり		
	V-2-6	褐灰色粘土(10YR4/1)にオーラープ灰色粘土ブロック(5GY6/1、φ～1cm)が混じる	非常に強い	あり		
	V'	炭化物層	黒褐色粘質土(10YR3/1)に炭化物(φ～1cm)が混じる	なし	あり	
	VI	創建時の整地層	礫(φ～10cm)が主体。褐色粘質土(10YR4/4)・褐色砂質土(10YR6/6)が混じる	あり	あり	上面には部分的にV'層がみられる
VI'-1	創建時の整地層	褐色砂質土(10YR4/4)に礫(φ～5cm)が混じる	ややなし	あり		
	VI'-2	暗褐色土(10YR3/3)に浅黄色粘土粒(2.5Y7/4、φ～5mm)・炭化物(φ～5mm)・礫(φ～5cm)が混じる	あり	あり		
VII-1-1		にぶい黄色粘質土(2.5Y6/4)・黄褐色粘質土(10YR5/6)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～1cm)が混じる	ややあり	非常に強い		
		灰黄色粘土ブロック(2.5Y6/2、φ～10cm)・灰黄褐色粘土ブロック(10YR5/2、φ～10cm)が主体	あり	あり		
		にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～10cm)が密に、炭化物(φ～1cm)が混じる	あり	あり		
		にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)ににぶい黄褐色粘土ブロック(10YR5/4・2.5Y6/4、φ～20cm)が密に混じる	ややあり	あり		
		灰黄褐色粘土(10YR4/2)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～1cm)・礫(φ～5cm)が混じる	あり	ややあり		
		褐色土(10YR4/6)に明黃褐色粘土ブロック(10YR6/6、φ～2cm)が混じる	ややあり	なし		
		灰黄褐色粘土(10YR5/2)に明褐色土ブロック(7.5YR5/6、φ～1cm)が混じる	あり	あり		
		暗褐色粘質土(10YR3/4)に明黃褐色粘質土粒(2.5Y7/6、φ～2mm)が混じる	あり	あり		
VII-2-1		灰黄褐色粘土(10YR4/2)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/8、φ～1cm)が混じる	ややあり	あり		
		暗褐色粘土(10YR3/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～3cm)が非常に密に混じる	あり	あり		
		黒褐色粘土(10YR3/2)ににぶい黄色粘土ブロック(2.5Y6/3、φ～5mm)が密に混じる	あり	あり		
		黒褐色粘土(10YR3/2)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～3cm)が非常に密に混じる	非常に強い	あり		
		にぶい黄橙色粘質土(10YR6/4)ににぶい黄橙色砂(10YR6/4)・灰白色の小礫(10YR8/1、φ2mm)が混じる	ややあり	あり	本堂VI-1層のひとつ	
		にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～5cm)が若干混じる	あり	あり		
		にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)ににぶい黄色粘土ブロック(10YR6/4、φ～50cm)が非常に密に混じる	非常に強い	ややあり		
		明オーラープ灰色粘土(2.5GY7/1)	あり	非常に強い		
VII-1	埋立土	にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)に浅黄色粘土ブロック(2.5Y7/4、φ～5cm)が若干混じる	あり	あり		
		にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)ににぶい黄色粘土ブロック(10YR6/4、φ～50cm)が非常に密に混じる	非常に強い	ややあり		
IX	地山	明オーラープ灰色粘土(2.5GY7/1)	あり	非常に強い		

第5表 検出構造一覧(1)

構造No.	場所	グリッド	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
SA01-1	本堂	本ぬ21	本V層	(37.4)	(24.4)	(12.1)	円	B		
SA01-2	本堂	本ぬ21	本V層	(19.6)	(14.6)	(7.2)	円	B		
SA01-3	本堂	本ぬ21	本V層	(15.6)	(14.2)	(5.4)	円	A		
SA02-1	本堂	本る21	本V層	(28.2)	(24.1)	(13.2)	円	-		
SA02-2	本堂	本る21	本V層	(16.5)	(12.4)	(6.3)	円	-		
SA02-3	本堂	本る21	本V層	(30.0)	(25.6)	(10.8)	円	-		
SA03-1	本堂	本を21	本V層	(40.4)	(34.0)	(15.3)	円	-		
SA03-2	本堂	本を21	本V層	(25.1)	(24.4)	(7.6)	円	-		
SA04-1	本堂	本を・わ21	本V層	(46.0)	(36.5)	(10.6)	円	-		
SA04-2	本堂	本を・わ21	本V層	(38.4)	(27.4)	(11.1)	椭円	-		
SA05-1	本堂	本わ21	本V層	(54.9)	(45.6)	(15.4)	円	-		
SA05-2	本堂	本わ21	本V層	(52.2)	(45.2)	(15.4)	円	-		
SA06-1	本堂	本か21	本V層	(28.1)	(25.0)	(9.1)	円	-		
SA06-2	本堂	本か21	本V層	(24.1)	(19.0)	(12.2)	円	-		
SA06-3	本堂	本か21	本V層	(20.2)	(19.1)	(10.8)	円	-		
SA07-1	本堂	本よ21	本V層	(43.6)	(40.0)	(15.0)	椭円	-		
SA07-2	本堂	本よ21	本V層	(25.4)	(20.4)	(11.0)	円	-		
SA07-3	本堂	本よ21	本V層	(22.6)	(21.0)	(10.2)	円	-		
SA08-1	本堂	本よ21	本V層	(35.9)	(27.0)	(15.7)	円	-		
SA08-2	本堂	本よ21	本V層	(25.9)	(24.4)	(11.5)	円	-		
SA08-3	本堂	本よ21	本V層	(26.3)	(22.0)	(11.1)	円	-		
SA09-1	本堂	本た21	本V層	(26.2)	(24.1)	(11.2)	円	-		
SA09-2	本堂	本た21	本V層	(23.8)	(21.2)	(10.1)	円	-		
SA09-3	本堂	本た21	本V層	(37.8)	(19.0)	(5.5)	椭円	-		
SA10-1	本堂	本れ21	本V層	(26.6)	(25.2)	(8.1)	円	B		
SA10-2	本堂	本れ21	本V層	(19.0)	(18.3)	(2.7)	円	B		
SA10-3	本堂	本れ21	本V層	(28.7)	(23.7)	(5.7)	円	A		
SA11-1	本堂	本そ21	本V層	(22.3)	(19.5)	(15.0)	円	-		
SA11-2	本堂	本れ・そ21	本V層	(34.5)	(33.2)	(6.9)	円	-		
SA11-3	本堂	本れ・そ21	本V層	(24.2)	(17.7)	(9.0)	円	-		
SA12-1	本堂	本そ21	本V層	(21.7)	(16.9)	(4.5)	円	B		
SA12-2	本堂	本そ21	本V層	(17.5)	(12.9)	(5.1)	円	B		
SA12-3	本堂	本そ21	本V層	(22.0)	(13.0)	(9.3)	円	B		
SA13-1	本堂	本つ・ね21	本V層	(24.9)	(15.2)	(8.8)	椭円	B		
SA13-2	本堂	本つ・ね21	本V層	(18.8)	(17.7)	(9.5)	円	B		
SA13-3	本堂	本つ・ね21	本V層	(19.9)	(17.9)	(6.1)	円	B		
SD01	本堂	本ぬ～ね21	本III-4層	(1703.4) 575.5	25.7 ~43.0	9.5~ 22.4		C		
SD02	本堂	本ぬ～を	本VI-1～層	1316.7	27.4 ~46.5	7.2~ 14.0		D		
SKP01	書院	書う2	書VII層	46.0	43.8	10.6	椭円	B		
SKP02	書院	書ほ4	書VII層	48.3	43.6	14.3	円	A		
SKP03	書院	書ほ4	書VII層	(41.2)	38.5	7.7	円	A		
SKP04	書院	書へ4	書VII層	-	-	20.4	円	A		
SKP05	書院	書と4	書VII層	(59.8)	43.1	9.3	椭円	B		
SKP06	書院	書ろ・は5	書VII層	(31.2)	30.5	15.9	椭円	B		
SKP07	書院	書は5	書VII層	64.8	(41.6)	22.2	椭円	B		
SKP08	書院	書ほ5又	書VII層	(47.6)	47.3	18.7	椭円	B		
SKP09	書院	書と5又	書VII層	53.9	52.6	14.3	円	B		
SKP10	書院	書ち5又	書VII層	57.7	37.3	8.4	椭円	A		
SKP11	書院	書ひ6	書VII層	64.0	44.8	22.7	不定	B		
SKP12	書院	書ほ7	書VII層	71.9	61.2	23.7	円	A		
SKP13	書院	書と7	書VII層	71.5	62.5	12.4	不定	A		
SKP14	書院	書ち7	書VII層	42.7	32.4	16.0	椭円	B		
SKP15	書院	書ち8	書VII層	59.2	47.7	14.6	椭円	B		
SKP16	書院	書へ9	書VII層	-	-	20.2	椭円	B		
SL01	本堂	本そ21	本III-1層	68.6	61.4	3.6	椭円	A		
SL02	本堂	本つ21	本III-1層	29.5	17.2	4.2	椭円	B		
SL03	本堂	本ぬ21	本III-2層	53.7	(46.6)	14.4	椭円	-	SL21 →	
SL04	本堂	本ぬ21	本III-2層	55.7	(49.8)	13.0	不定	-		
SL05	本堂	本ぬ・る21	本III-2層	118.3	48.8	5.0	不定	-		
SL06	本堂	本る21	本III-2層	(82.4)	44.0	4.3	不定	-		
SL07	本堂	本る21	本III-2層	49.1	(48.4)	6.1	不定	-		
SL08	本堂	本る21	本III-2層	36.7	(27.6)	7.6	不定	-		

第6表 検出構造一覧 (2)

構造No.	場所	グリッド	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
SL09	本堂	木る21	本III-2層	26.9	21.3	1.7	円	-		
SL10	本堂	木を21	本III-2層	36.7	30.4	2.5	梢円	-		
SL11	本堂	木を21	本III-2層	27.0	22.8	2.6	円	-		
SL12	本堂	木わ21	本III-2層	20.2	17.5	5.0	円	-		
SL13	本堂	木わ21	本III-2層	48.2	47.6	8.6	円	-		
SL14	本堂	木か21	本III-2層	63.2	46.9	5.5	不定	-		
SL15	本堂	木か21	本III-2層	20.6	18.4	5.5	円	-		
SL16	本堂	木よ21	本III-2層	53.6	45.6	8.3	梢円	-		
SL17	本堂	木よ21	本III-2層	46.4	43.1	3.5	円	-		
SL18	本堂	木よ21	本III-2層	68.4	47.6	8.6	不定	-		
SL19	本堂	木た21	本III-2層	39.5	37.6	7.0	円	-		
SL20	本堂	木た21	本III-2層	18.0	18.0	3.9	円	-		
SL21	本堂	木ぬ21	-	59.3	(57.7)	6.5	円	A	→ SL03	
SM01	書院	書～13	書IV-3層	279.3	125.8	32.9	隅丸 方形	A		
SP01	本堂	木か14	本VI層	36.5	28.1	1.9	梢円	A		
SP02	本堂	木か16	本VI層	42.8	38.8	9.1	梢円	A		
SP03	本堂	木か16	本VI層	40.5	26.9	7.2	梢円	A		
SP04	本堂	木か16	本VI層	45.0	36.9	1.8	梢円	A		
SP05	本堂	木か16	本VI層	42.8	32.7	5.6	梢円	A		
SP06	本堂	木か16	本VI層	39.8	39.4	9.6	円	A		
SP07	本堂	木か16	本VI層	43.7	(37.6)	5.5	梢円	A	→ SP08	
SP08	本堂	木か16	本VI層	27.0	17.6	4.6	梢円	B	SP07・09 →	
SP09	本堂	木か16	本VI層	(42.4)	39.0	4.2	梢円	A	→ SP08	
SP10	本堂	木か16	本VI層	51.9	41.1	13.1	梢円	B	→ SP11	
SP11	本堂	木か16	本VI層	40.7	25.3	8.7	梢円	B	SP10・12 →	
SP12	本堂	木か16	本VI層	(28.8)	23.6	2.5	梢円	A	→ SP11	
SP13	本堂	木か16	本VI層	38.3	27.2	5.8	円	A	→ SP14	
SP14	本堂	木か17	本VI層	(62.2)	74.2	8.5	梢円	A	SP13 →	
SP15	本堂	木か14	本VI層	40.8	(30.2)	5.4	梢円	A		
SP16	本堂	木か14	本VI層	29.3	27.7	5.5	円	A		
SP17	本堂	木か14	本VI層	21.3	20.5	6.8	円	B		
SP18	本堂	木そ16	本VI層	50.9	41.4	7.4	梢円	A		
SP19	本堂	木そ16	本VI層	30.3	27.9	5.9	円	A		
SP20	本堂	木そ16	本VI層	44.9	43.2	5.8	梢円	B		
SP21	本堂	木そ16	本VI層	40.5	(33.0)	7.4	梢円	A		
SP22	本堂	木そ18	本VI層	42.6	32.2	4.9	梢円	A		
SP23	本堂	木そ18	本VI層	48.2	(41.2)	6.8	梢円	A	→ SP24	
SP24	本堂	木そ18	本VI層	39.5	38.1	5.6	不定	A	SP23 →	
SP25	本堂	木れ・そ18	本VI層	39.0	28.0	2.6	梢円	A		
SP26	本堂	木れ・そ18	本VI層	30.5	25.9	6.8	梢円	A		
SP27	本堂	木れ21	本VI層	40.3	39.8	30.6	円	B		
SP28	本堂	木れ21	本VI層	43.2	42.3	6.0	円	B		
SP29	本堂	木れ21	本VI層	45.5	32.3	27.0	梢円	B		
SP30	本堂	木ね19	本VI層	79.3	41.5	19.0	梢円	B		
SP31	本堂	木れ21	本VI層	46.3	(38.2)	5.7	梢円	A		
SP32	本堂	木れ21	本VI層	46.7	30.6	12.2	梢円	B		
SP33	本堂	木れ21	本VI層	44.5	(38.4)	4.8	梢円	A		
SP34	書院	書ち4	書III-2層	47.0	(41.2)	19.1	梢円	B		
SP35	書院	書ろ12	書IV-3層	38.0	34.5	12.9	円	B		
SP36	書院	書ろ12	書IV-3層	31.9	27.0	7.0	円	A		
SP37	書院	書ろ12	書IV-3層	32.4	26.9	5.7	円	A		
SP38	書院	書～11	書IV-3層	31.4	30.9	7.8	円	B		
SP39	書院	書と又11	書IV-3層	32.3	27.6	15.5	円	B		
SP40	書院	書と又11	書IV-3層	40.9	38.0	12.0	円	B		
SP41	書院	書ろ3	書VII層	26.1	27.6	9.6	円	A		
SP42	書院	書ろ3	書VII層	42.1	37.9	9.6	梢円	A		
SP43	書院	書ろ4	書VII層	45.4	39.7	8.7	円	B		
SP44	書院	書ろ4	書VII層	44.0	31.5	5.5	梢円	A		
SP45	書院	書ろ4	書VII層	42.2	28.1	14.0	梢円	B	SP46 →	
SP46	書院	書ろ4	書VII層	31.9	(28.4)	10.5	梢円	B	→ SP45	
SP47	書院	書ろ5	書VII層	(36.1)	(32.5)	11.3	円	B		
SP48	書院	書は5	書VII層	35.4	32.8	6.4	梢円	B		
SP49	書院	書は6	書VII層	50.7	47.1	8.4	不定	A		

第7表 検出構造一覧(3)

構造No.	場所	グリッド	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
SS01	書院	書は4	-	32.7	23.1	12.3				VII層面に据えられる
SS02	書院	書は5	-	49.6	27.7	-				VII層面に据えられる
SS03	書院	書と又8	-	49.4	30.4	11.1				VII層面に据えられる
SS04	書院	書と又9又	-	28.4	22.4	8.5				VII層面に据えられる
SS05	書院	書い11-12	-	45.0	42.0	18.0				VII層面に据えられる
SS06	書院	書い13-15	-	39.6	39.0	-				VII層面に据えられる
SS07	書院	書り11	-	54.0	48.0	-				VII層面に据えられる
SS08	書院	書り13柱下	-	46.5	42.0	-				VII層面に据えられる
SX01	本堂	本ぬ17	本II-4層	238.9	(138.0)	19.0	不定	B		
SX02	本堂	本る18	本II-4層	89.4	69.5	10.5	不定	B	SX09 →	
SX03	本堂	本る19	本II-4層	148.8	83.2	4.7	不定	A		
SX04	本堂	本れ21	本III-3層	47.9	40.7	9.5	円	A		
SX05	本堂	本か21	本III-3層	28.6	27.3	10.6	方形	B		
SX06	本堂	本ね12	本V層	84.0	74.5	7.5	梢円	A		
SX07	本堂	本る18	本V層	106.3	50.5	12.3	梢円	A		
SX08	本堂	本る18	本V層	90.8	66.7	17.6	梢円	B		
SX09	本堂	本る18	本V層	114.1	76.1	17.2	梢円	B	→ SX02	
SX10	本堂	本る19	本V層	222.2	151.1	18.7	不定	A	SX11 →	
SX11	本堂	本る19	本V層	(77.8)	70.2	7.4	不定	A	→ SX10	
SX12	本堂	本ぬ18	本V層	279.2	(199.0)	33.6	隅丸 方形	A		
SX13	本堂	本ぬ19	本V層	295.0	222.4	26.4	隅丸 方形	A		
SX14	本堂	本る20	本V層	43.6	38.3	5.0	円	A		
SX15	本堂	本る20	本V層	38.8	31.4	11.8	円	A		
SX16	本堂	本か20	本V層	68.3	47.2	10.1	隅丸 方形	B		
SX17	本堂	本ね20	本V層	66.8	(66.0)	24.4	円	B		
SX18	本堂	本よ20-21	本VI層	83.7	54.9	12.9	梢円	B		
SX19	書院	書り11	書III-1層	111.6	87.9	18.7	不定	B		擾乱の可能性あり
SX20	書院	書り11	書III-1層	106.1	66.6	16.9	不定	B	SX21 →	
SX21	書院	書り11	書III-2層	(87.8)	45.6	15.8	不定	B	→ SX20	
SX22	書院	書ち11	書IV-3層	86.9	60.6	20.4	梢円			
SX23	書院	書ち12-13	書IV-3層	78.6	73.8	16.0	不定	B		擾乱の可能性あり
SX24	書院	書は9	書IV-6層	146.1	33.9	17.0	帯状	B		
SX25	書院	書は10	書IV-6層	157.4	41.1	17.7	帯状	B		
SX26	書院	書ろ11	書IV-6層	61.9	(59.8)	13.7	梢円	A		
SX27	書院	書～15・16	書VI' -1層	129.4	(109.4)	9.6	隅丸 方形	B		
SX28	書院	書と又15・16	書VI' -1層	76.6	58.7	15.5	梢円	A		
SX29	書院	書と又15	書VI' -1層	(38.4)	35.4	12.2	梢円	A		
SX30	書院	書ち7	書VII-1-1	(61.2)	43.2	8.0	梢円	A		
SX31	書院	書は7又	書VII-1-1	111.1	35.1	14.8	帯状	A		
SX32	書院	書は8	書VII-1-1	139.4	52.6	14.9	帯状	A		
SX33	書院	書り8	書VII層	97.0	54.0	10.7	梢円	B		
SX34	書院	書り8	書VII層	(102.6)	53.7	10.6	不定	B		
SX35	書院	書ち15・16	本VI-1-1層	57.8	50.3	22.5	梢円	B		

※「断面形」は、以下の記号で表した。

A : 壁面が緩やかに立ち上がる

B : 壁面が垂直・垂直気味に立ち上がる

C : U字状

D : 盔状

※「重複関係」は、以下の記号で表した。

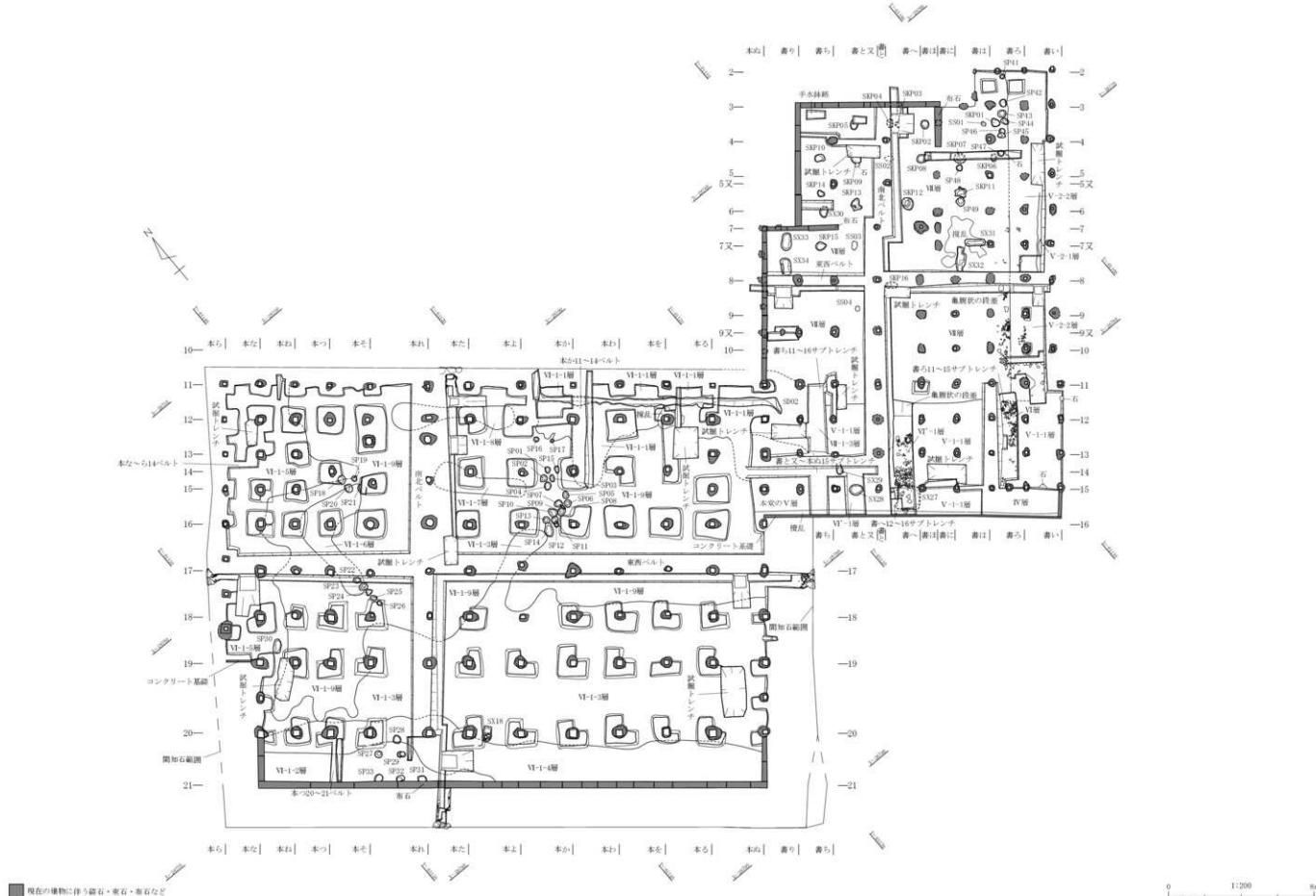
例 SA01 → : 当該遺構がSA01よりも新しい。

→ SA01 : 当該遺構がSA01よりも古い。

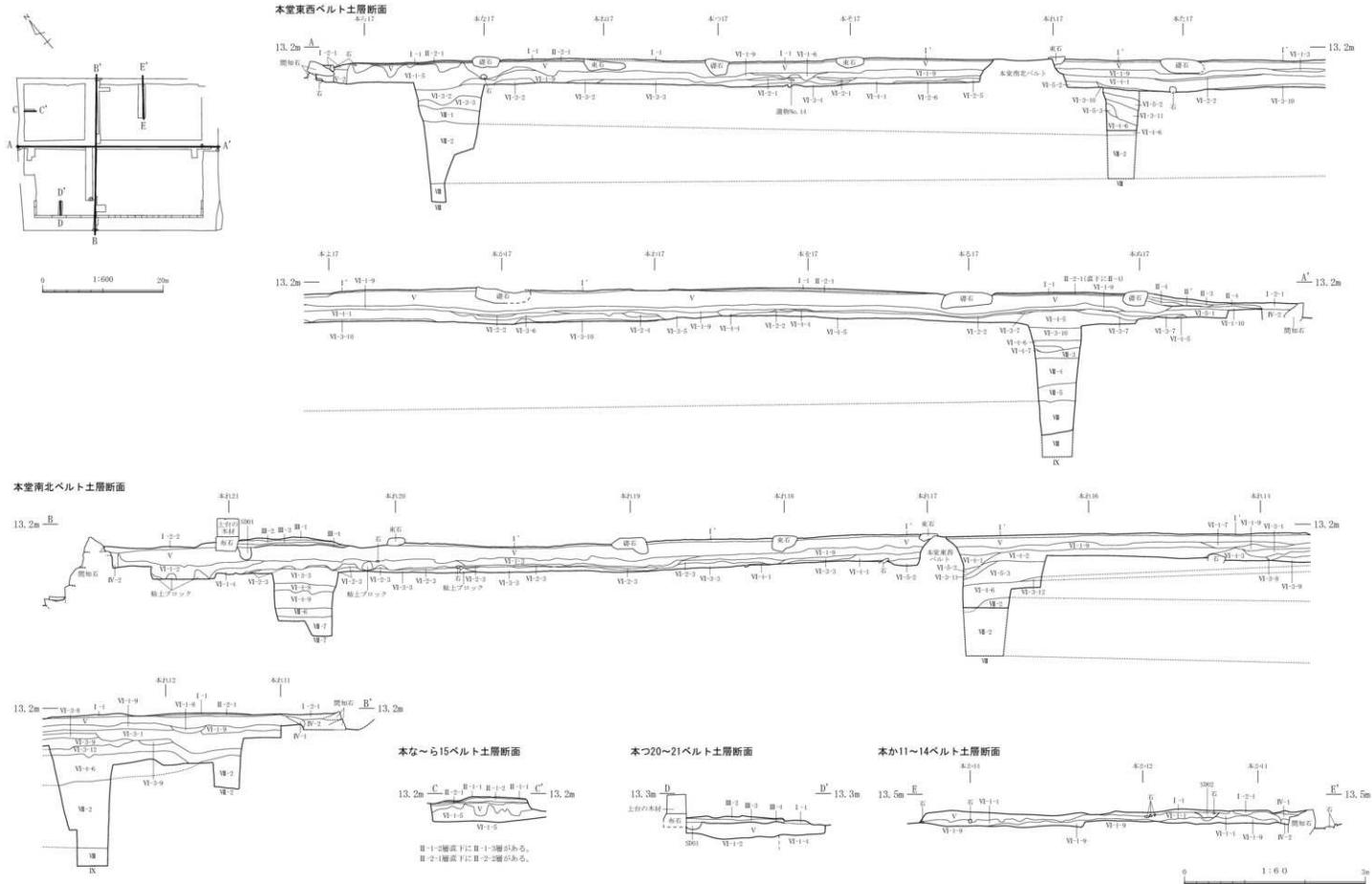
第8表 遺物属性表

遺物No.	出土地点・層位	グリッド	種別	器種	時期区分	年代	生産地	特徴
01	本III-1層	本ね21	磁器	碗	IV	18C代	肥前系	染付、コンニャク印判
02	本III-2層	本る21	陶器	碗	I-2	17C初	肥前系	灰釉
03	本III-2層	本を21	磁器	皿	IV	18C中葉	肥前系	外面青磁、内面染付、蛇ノ目印型高台
04	本III-2層下層	本を21	磁器	瓶	III	17C後半	肥前系	染付
05	本III-3層	本れ21	磁器	碗	III~IV	18C代	肥前系	染付
06	本III-4層	本そ21	陶器	皿		17C~	瀬戸美濃系	灰釉
07	SD01	本る21	土器	かわらけ (皿)		17C中葉~後半	在地系	
08	SD01	本か21	土器	かわらけ (皿)		17C中葉~後半	在地系	
09	SD01	本た21	土器	かわらけ (皿)		17C中葉~後半	在地系	
10	SD01	本そ21	土器	かわらけ (皿)		17C中葉~後半	在地系	
11	本V層下層	本た14	磁器	碗		17C前半	中国産	染付
12	本V層下層	本た14	磁器	碗	III	17C後半	肥前系	染付
13	礎石「本た18」	本た18	陶器	碗	II	17C前半	肥前系	灰釉
14	本VI-3-3層	本そ18	陶器	擂鉢				
15	本VI-3-6層	本か18	陶器	碗	II	17C前半	肥前系	灰釉
16	本VI-3-6層	本わ18	陶器	(端反碗)		17C前半	中国産	灰釉
17	本VI-3-6層	本わ18	陶器	天目茶碗	II	17C前半	肥前系	鐵釉
18	本VI-3-6層	本わ18	陶器	小壺				灰釉
19	本VI-3-6層	本わ18	磁器	碗	II-2	17C前半	肥前系	染付
20	本VI-3-6層	本わ18	磁器	小壺			中国産	
21	本VI-4-9層	本た21	磁器	瓶	II	17C前半	肥前系	染付
22-1		本れ17	磁器	蓋	III	17C後半	肥前系	染付
22-2		本れ17	磁器	壺	III	17C後半	肥前系	染付
23	書III-1層	書ら5	磁器	碗	IV	18C後半	肥前系	染付
24	書IV-2層	書う3	陶器	鉢	IV	18C代	肥前系	銅綠釉
25	書IV-2層	書は5	磁器	碗	II	17C前半	肥前系	染付
26	書IV-2層	書ほ7	土器	かわらけ (皿)			在地系	墨書きあり
27	書IV-3層	書へ15	磁器	碗		18C代	瀬戸美濃系	染付
28	書IV-4層	書へ12	磁器	碗	IV~V	1770~1810年代	肥前系	染付
29	書IV-4層	書へ12	磁器	碗	IV	1750~1770年代	(波佐見産)	染付
30	書IV-6層	書へ9又	陶器	皿 (横溝皿)	II	17C前半	肥前系	灰釉
31	書IV-6層	書へ12	磁器	碗	IV	1700~1750年代	肥前系	染付
32	書V-1-1層	書ち16	陶器	鉢・壺	IV	18C前葉~中葉	肥前系	
33	書V-1-1層	書ち13	磁器	碗	IV	18C前葉~中葉	肥前系	染付
34	書V-1-2層	書へ16	磁器	碗	III	17C後半	肥前系	染付
35	書V-1-2層	書う15	磁器	皿	III~IV	1680~1720年代	肥前系	染付
36	書V-1-4層	書へ16	磁器	皿	IV	18C後半	肥前系	染付、蛇ノ目印型高台
37	書V-1-6層	書う15	磁器	碗	IV	18C代	肥前系	染付
38	書V-2-2層	書う11	磁器	蕎麦猪口	IV	18C中葉	肥前系	染付
39	書V-2-2層上層	書う10	磁器	蕎麦猪口	IV	18C中葉	肥前系	染付
40	書V-2-5層	書い8西側	磁器	(仏花瓶)	III~IV	18C代	肥前系	青磁
41	書V-層	書と15	磁器	碗	IV	18C代	肥前系	染付
42	書V-層	書う15	磁器	皿	IV	18C前半	肥前系	染付
43	書VI層	書う11~15 ナガトレンチ	陶器	碗	II-1	17C前半	肥前系	灰釉
44	書VI層	書う11~15 ナガトレンチ	磁器	碗	IV	18C前葉~中葉	肥前系	染付
45	SKP15	書と8	磁器	碗	IV~V	18C後半	肥前系	染付、書IV-4層出土 遺物と接合

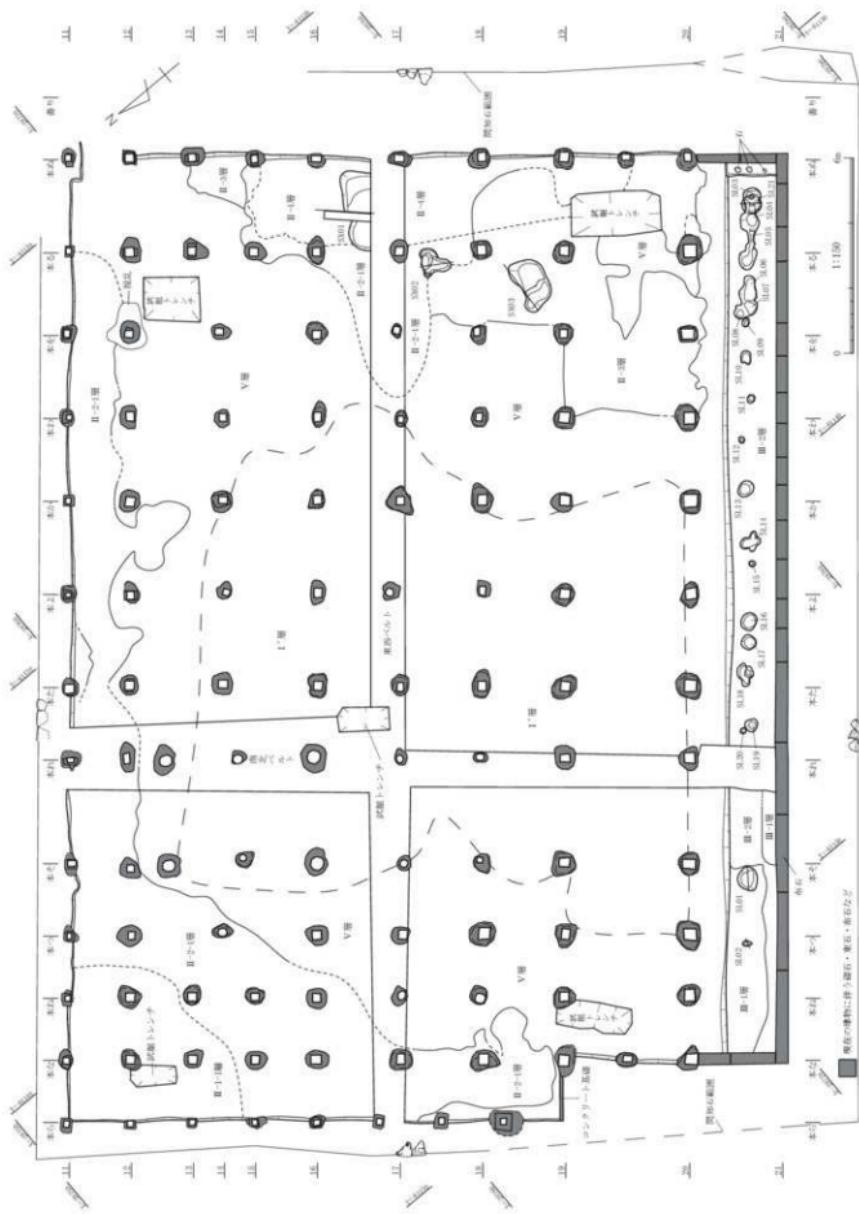
※「時期区分」は、「九州陶磁の編年」(九州近世陶磁学会2000)に基づく。



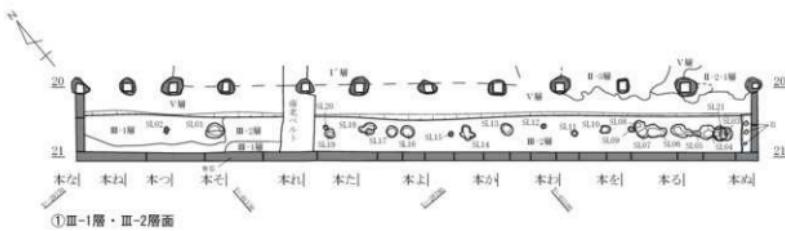
第1図 全体平面図(本堂第VI層面、書院第V～VII層面)



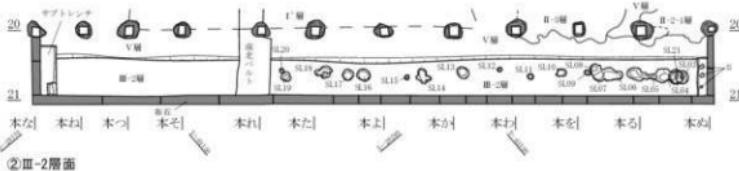
第2図 本堂土層断面図



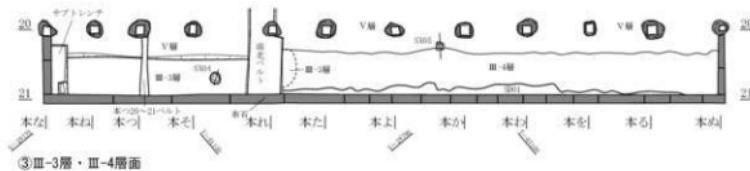
第3図 本堂第II階平面図



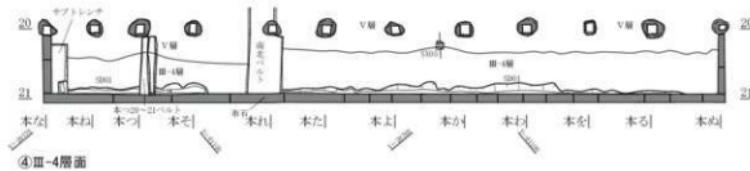
① III-1層・III-2層面



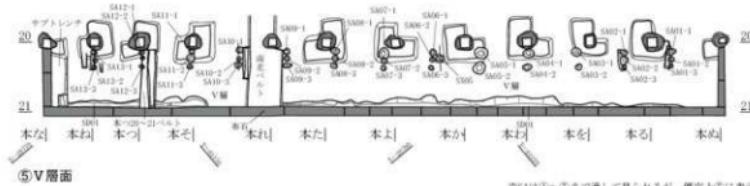
② III-2層面



③ III-3層・III-4層面



④ III-4層面

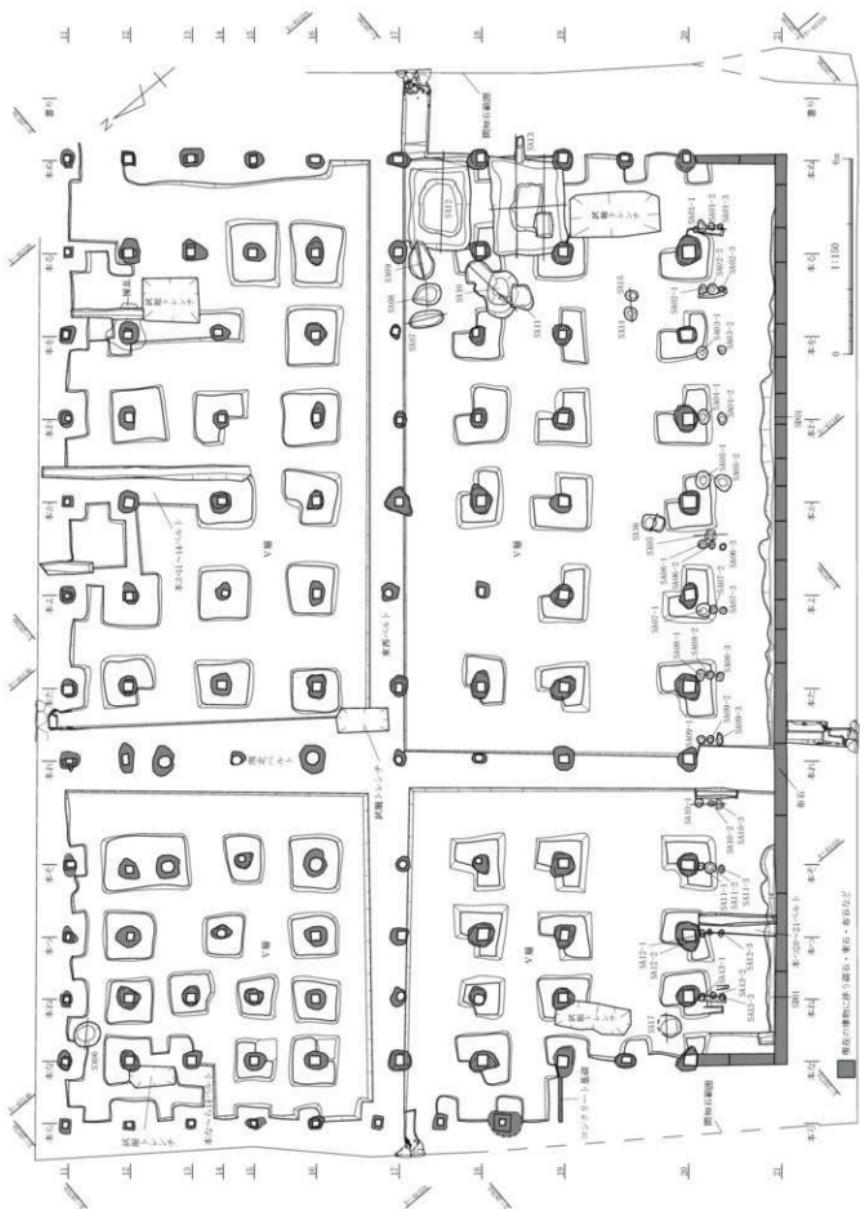


※SAII ①～⑤まで通して見られるが、便宜上⑤に表示した。

■ 現在の建物に伴う礎石・東石・西石など

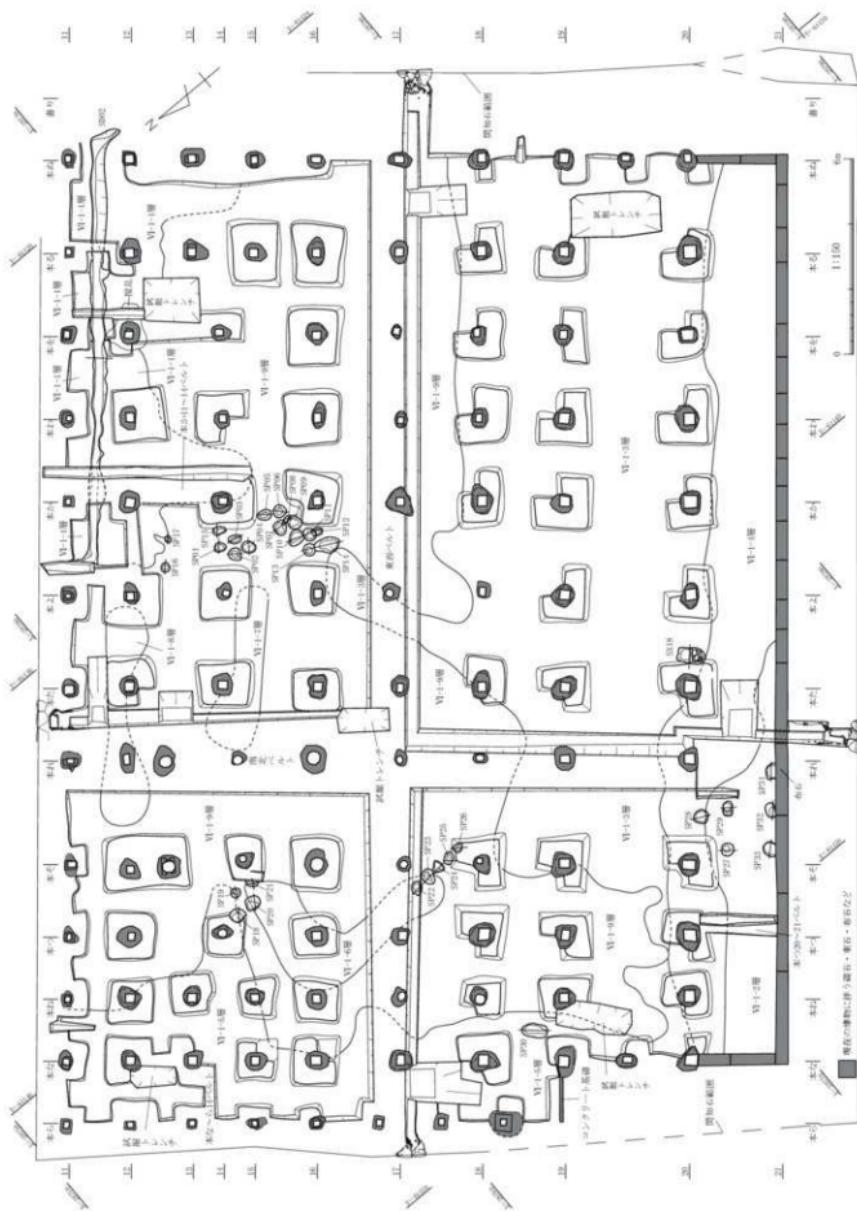
0 1:200 8m

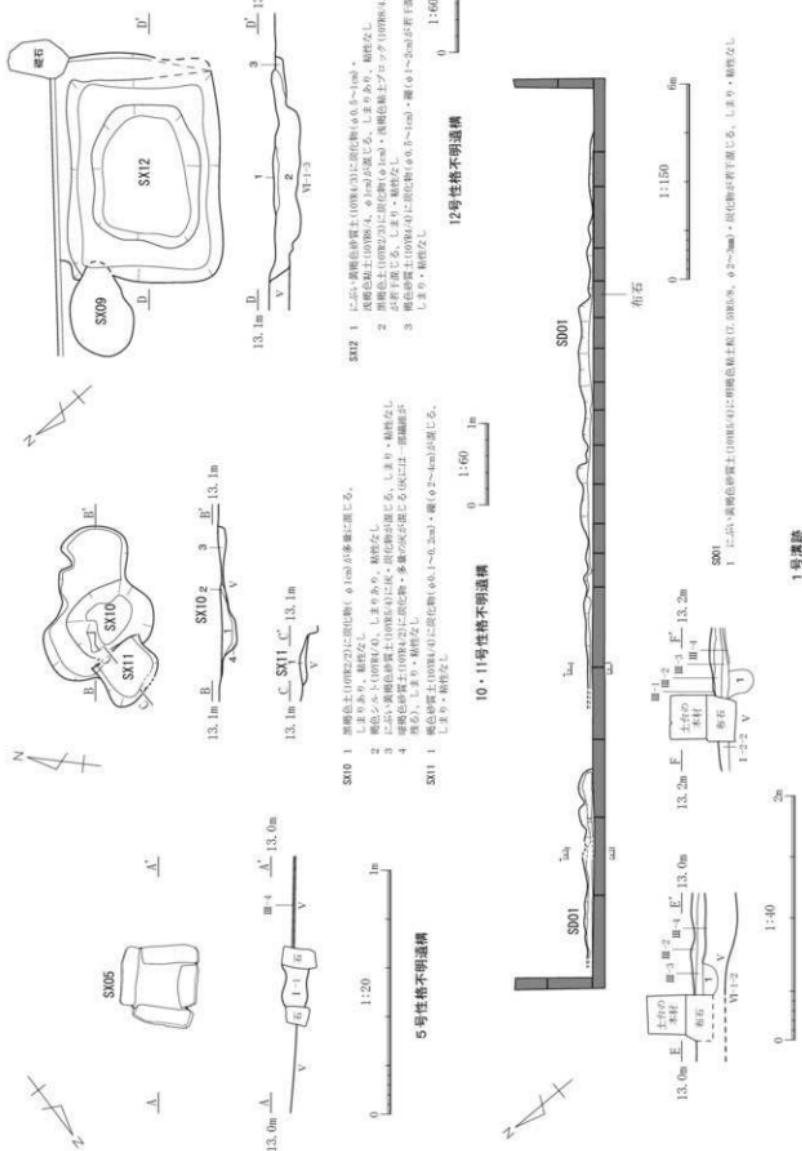
第4図 本堂第III層面平面図



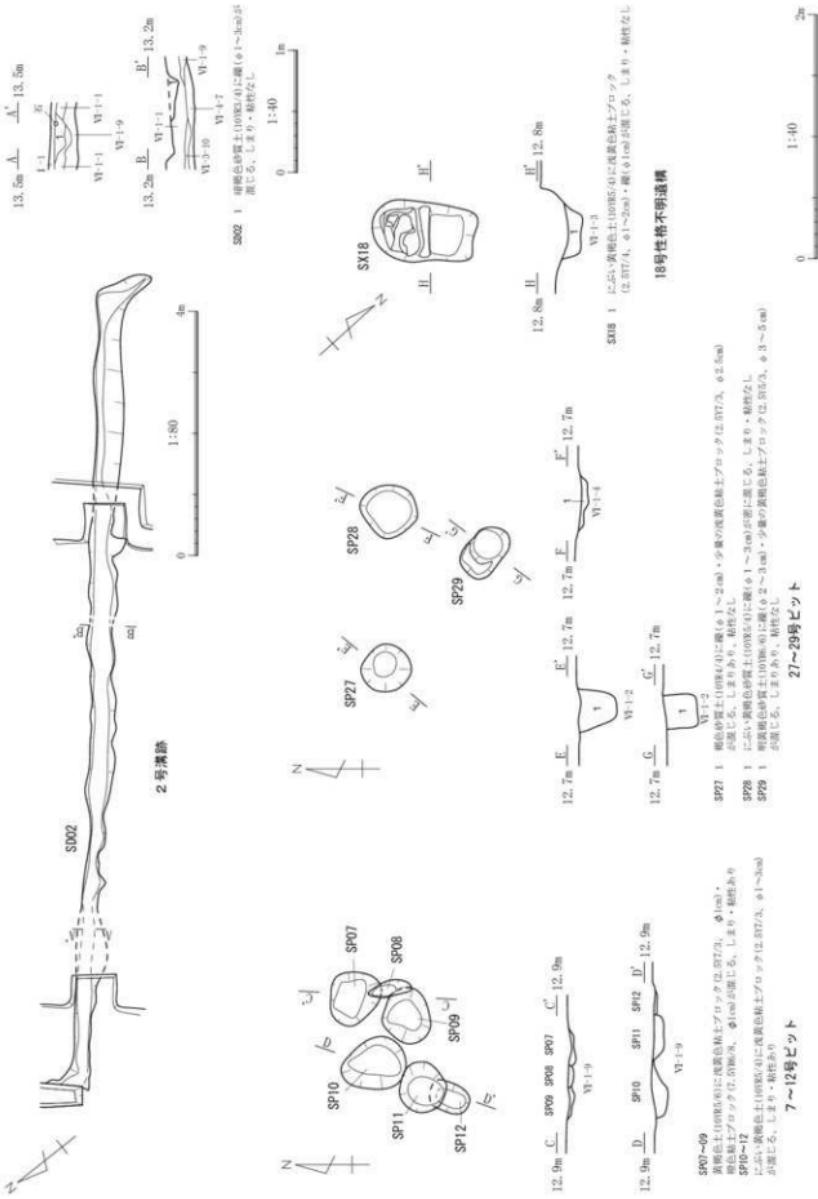
第5図 本堂第V層平面図

第6図 本堂第VI層平面図

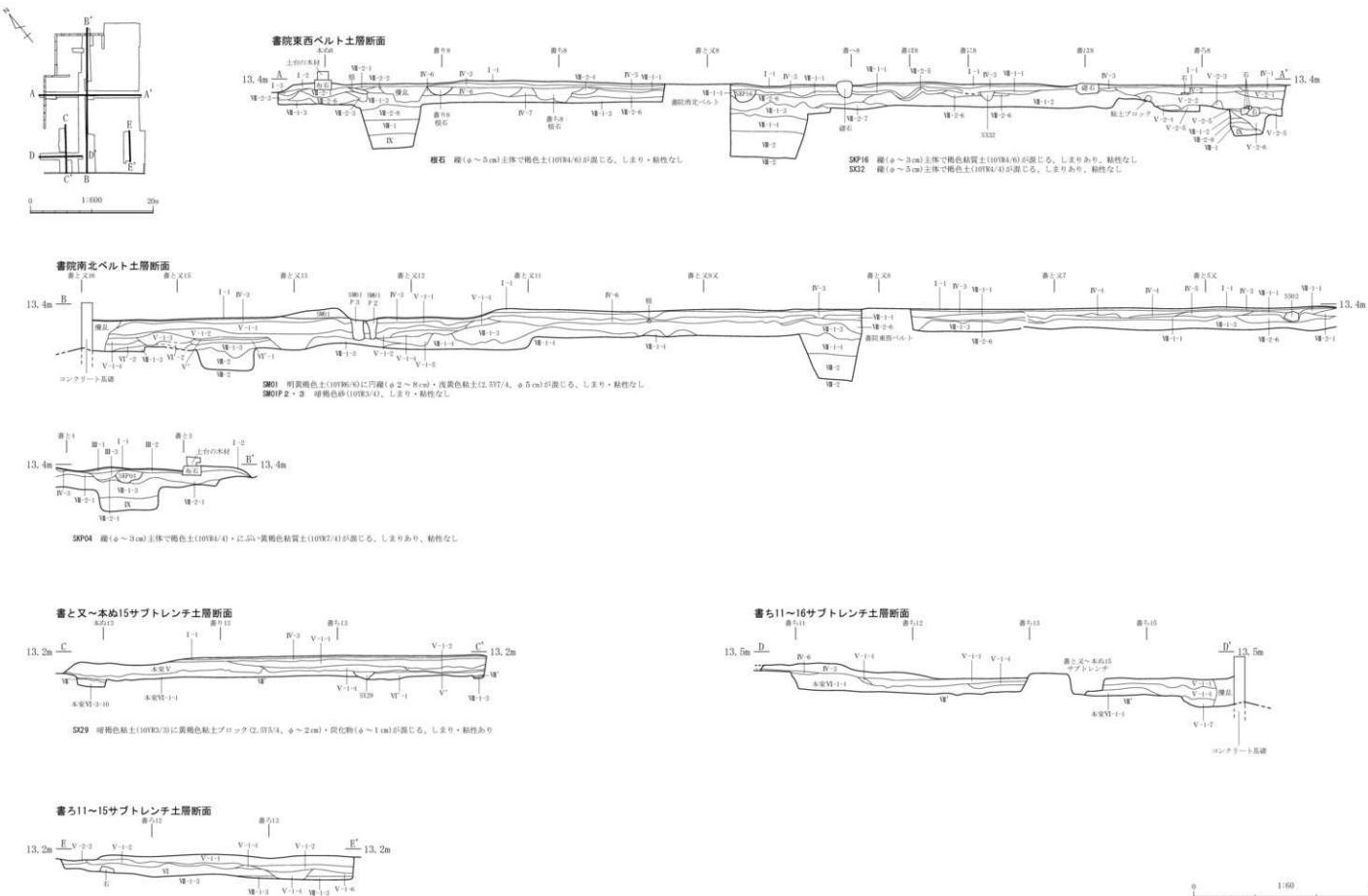




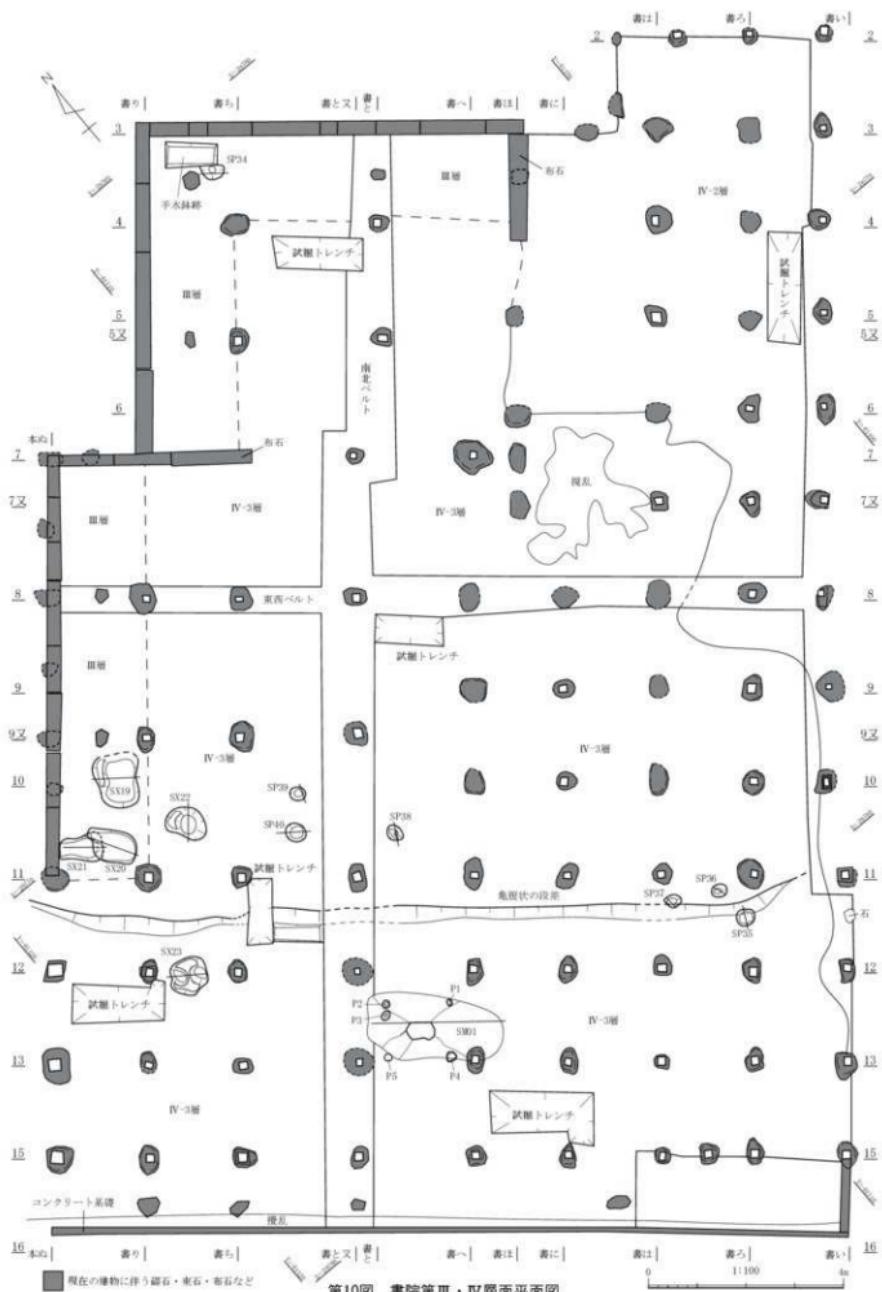
第7図 本堂第III・V層面検出透構

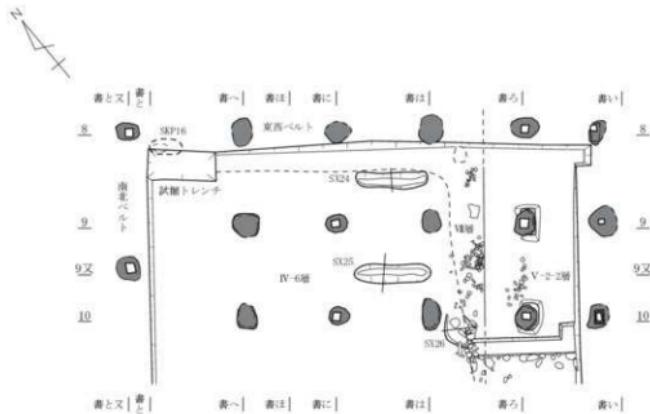


第8図 本堂第VI層面積出遭構

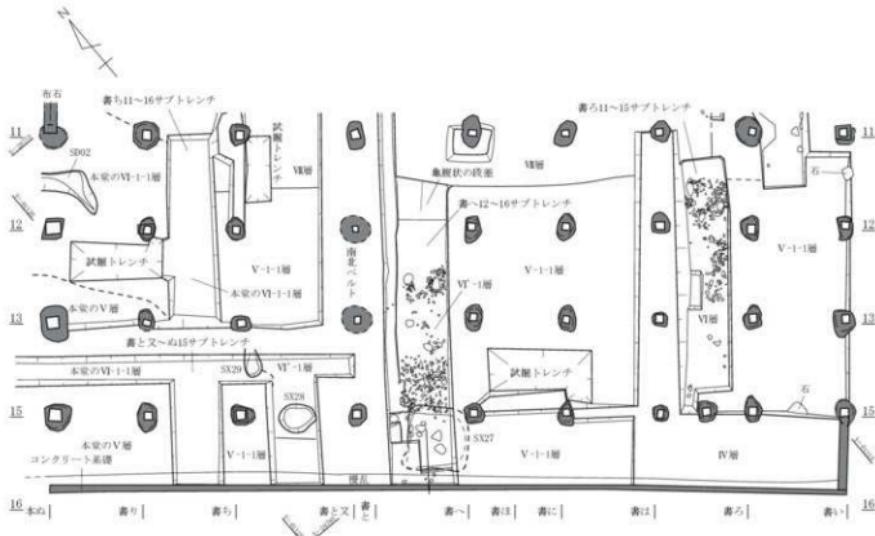


第9図 書院士層断面図

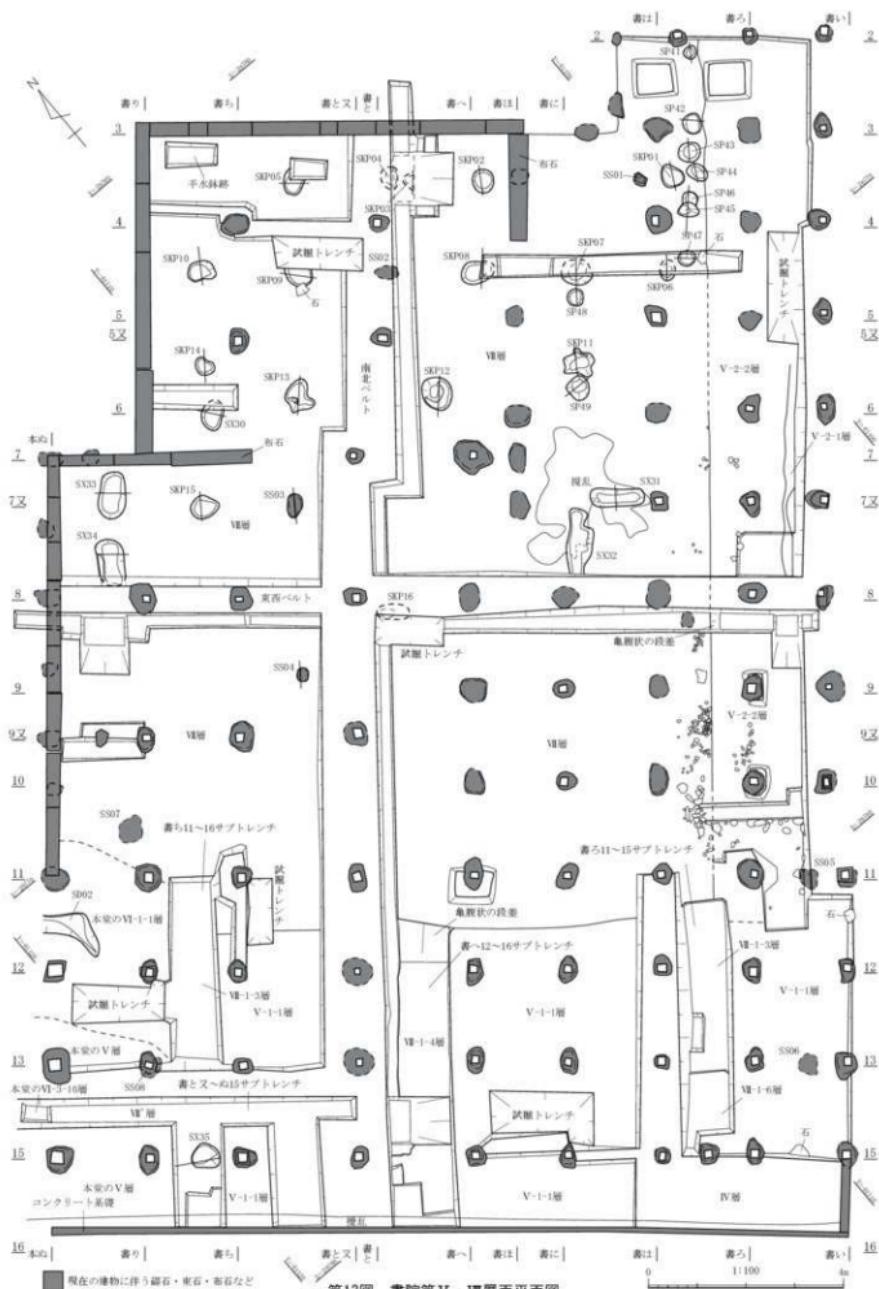




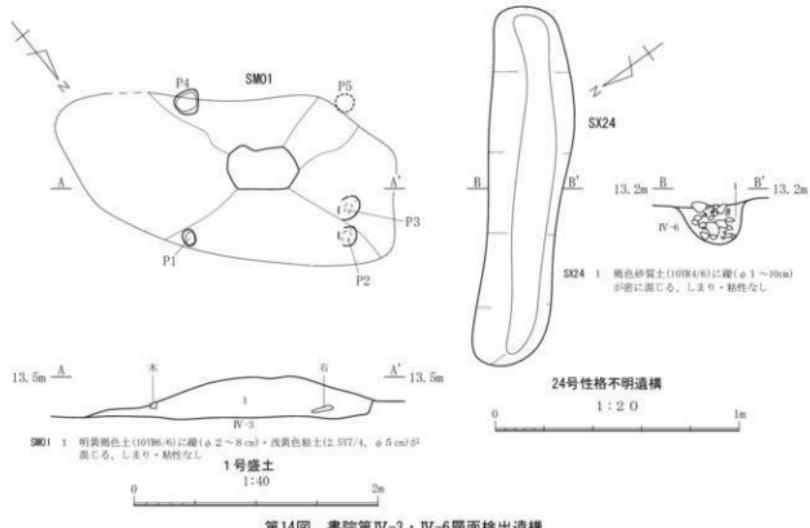
第11図 書院第IV-6層面平面図



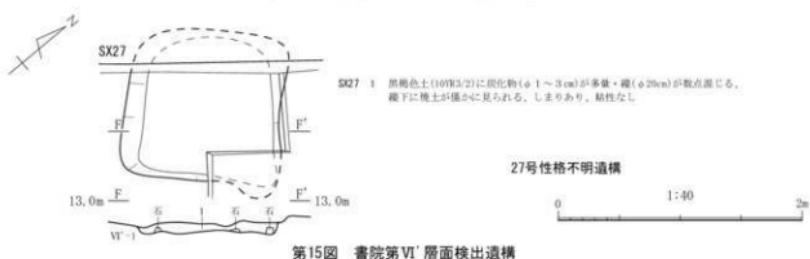
第12図 書院第V・VI層面平面図



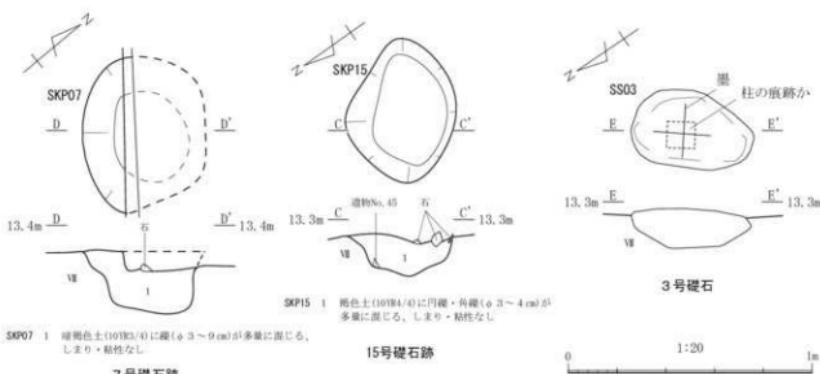
第13図 書院第V・VII層面平面図



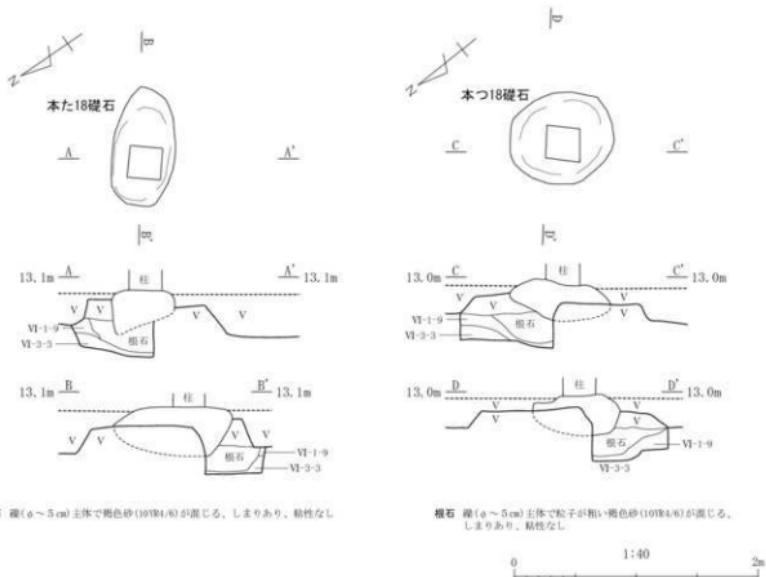
第14図 書院第IV-3・IV-6層面検出造構



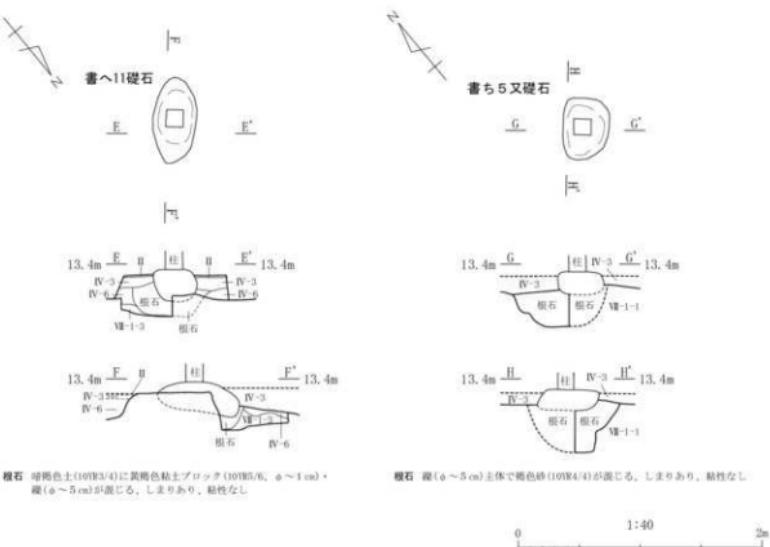
第15図 書院第VI'層面検出造構



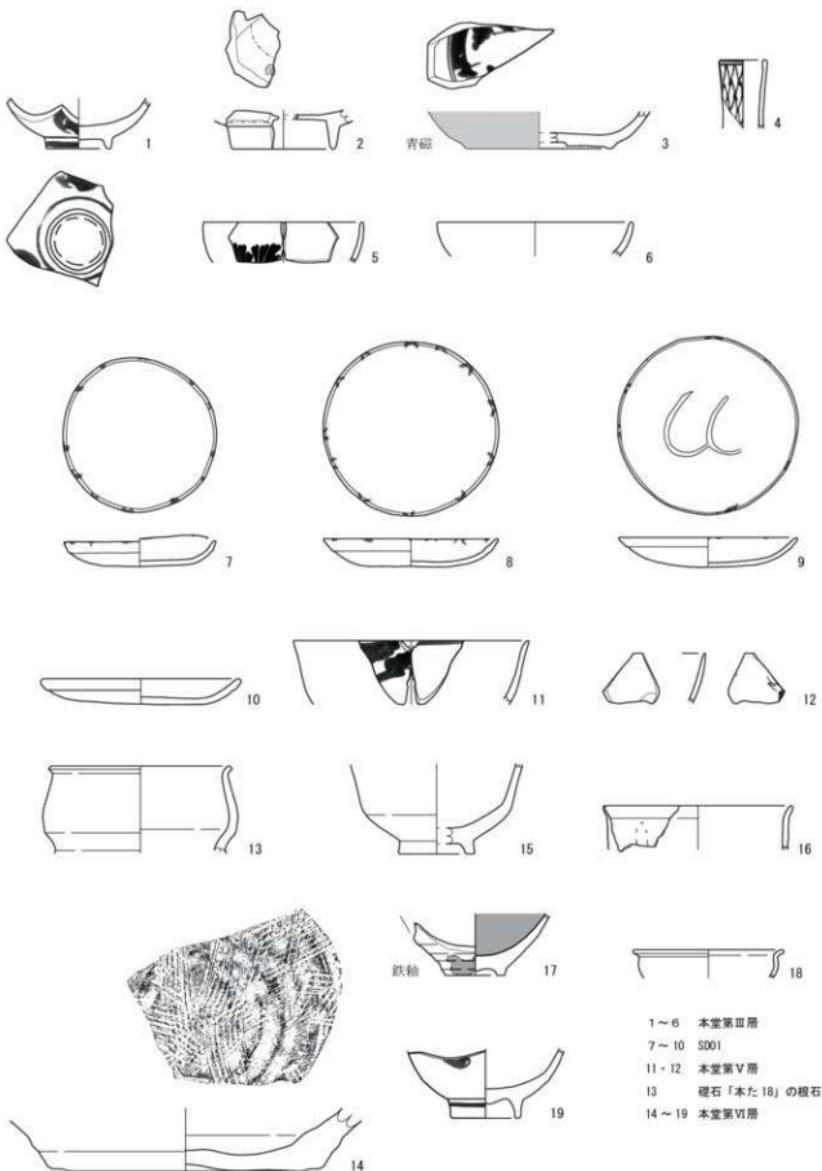
第16図 書院第VII層面検出造構



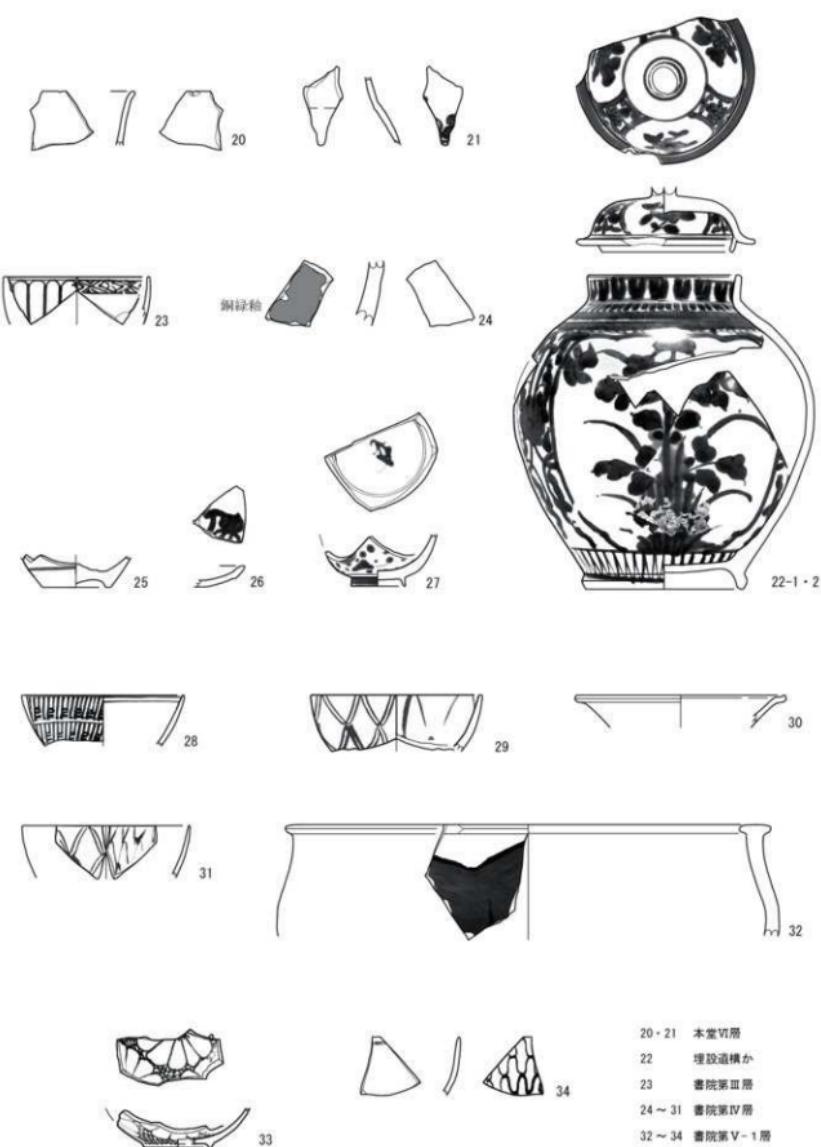
第17図 本堂基礎石詳細図



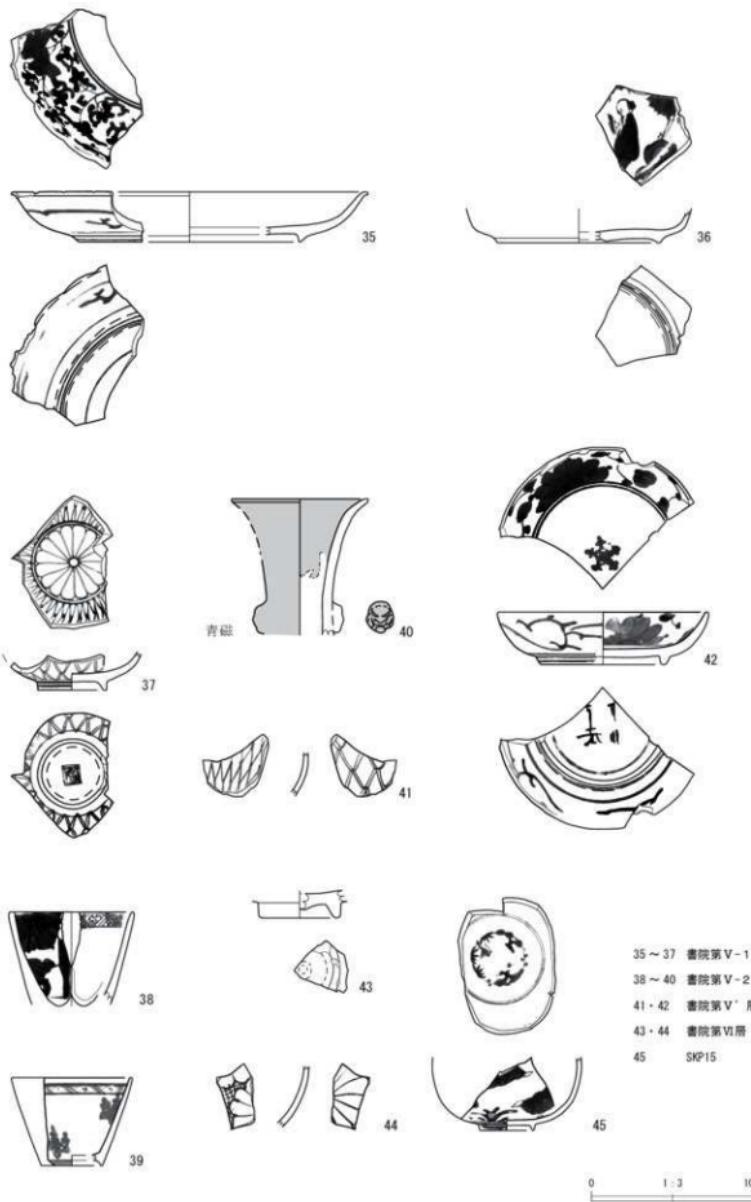
第18図 書院基礎石詳細図



第19図 本堂出土遺物



第20図 本堂・書院出土遺物



第21図 書院出土遺物

## 第4章 総括

### 第1節 基壇の造成過程と年代

本堂・書院とも、基壇の造成過程を把握するため一部深掘りして土層の堆積状況を確認した（第2・9図、図版5・9・10）。その結果、地山までの深さは書院北・東・西側が浅く、書院中央から本堂にかけて深くなること、本堂では書院にはない湿地の堆積土を確認したことなどから、基壇造成前の旧地形は、書院北側から書院中央を通る沢状の窪地が本堂北東側にかけて続き、本堂全城は沢尻に広がる湿地であったと考えられる。

旧地形の上には、下から順に埋立土（本堂第VII層、書院第VIII層）と突き固めた粘土（本堂第VI層、書院第VII層）が堆積することを確認した。これらの層からの出土遺物はほぼ皆無であるが、本堂東西ペルト南壁際の「本かへわ列」付近の粘土層上部（本堂第VI-3-6層）から、17世紀前半の遺物が集中して出土した（第19・20図15~20、図版13）。「梅津政景日記」によると、寛永2年（1625）に初代藩主佐竹義宣が天徳寺の移転先を「和泉之内二見たて」としている（財団法人文化財建造物保存技術協会編1998）。その後現在地で順次諸堂が整備されたと思われるが、この年代と出土遺物の年代が一致することから、本堂の粘土層（本堂第VI層）は当該地での創建時の造成土であり、今まで一貫して基壇を形成していると考えられる。また、「書と又～本ぬ15サブトレンチ」や「書ち11～16サブトレンチ」では、書院の粘土層の上に本堂の粘土層の一部（本堂第VI-1-1層）がみられることから、書院の基壇造成は本堂に先立ち、あるいは、ほぼ同時期に行われたと考えられる。

以上のことから、檜山から当該地への移転に伴い、17世紀前半に湿地を埋め立て、さらに粘土を突き固めて本堂・書院の基壇を造成するという大規模地業を行ったと考えることができる。なお、本堂南北ペルト北端の埋立土（本堂第VII-2層）中から出土した2本の角材（断面寸法は9.5×9.0cm・11.6cm×13cm、図版5）は、湿地を埋め立てる際に沈下を防ぐ目的で組まれた桐木の一部としての転用材である可能性があり、基壇造成の工程を考えるうえで参考になるものである。

本堂の粘土層（本堂第VI層）および書院の粘土層（書院第VIII層）から出土した炭化物8点について、放射性炭素年代測定を行った（別編「放射性炭素年代（AMS測定）」参照）。その結果、<sup>14</sup>C年代で250±20~370±20yrBP、曆年較正年代（1σ）で大きく3つの範囲（1465~1603 calAD、1575~1665 calAD、1786~1793 calAD）で年代が示された。この内、本堂VI-3-3層出土の炭化物1点のみが17世紀中葉と18世紀後半の2つの範囲を示したが、それ以外は全て17世紀前半より新しい年代を示さなかった。これは、出土遺物から推定した年代とほぼ一致しており、出土遺物による年代推定が支持される結果となった。

### 第2節 本堂建築までの工程とその後の変遷

前述したとおり、本堂の基壇は17世紀前半に造成され、現在の本堂もその上に建っていると考えられる。以下に、検出遺構と出土遺物などから推定される本堂建築までの工程とその後の変遷について順を追って述べる。ここでは、延宝4年（1676）に焼失した本堂を「本堂Ⅰ期」、焼失後に再建した本堂（現在の本堂）を「本堂Ⅱ期」とする（第10表）。

#### （1）埋め立て後の基壇造成（粘土での造成）

本堂の基壇は、湿地を埋立土（本堂第VII層）で埋めた後、粘土（本堂第VI層）を幾重にも積み上げ突

き固めて造成している。粘土は場所によって複雑に重なり合っているが、最上層は大部分が本堂第VI-1-3・VI-1-9層で、全体をほぼ平坦に仕上げている。ただし、「本ね列」以西の粘土最上層（本堂第VI-1-5層）は表面に起伏があり、他よりもやや柔らかい印象を受ける。当該部分は下屋の地面であり、他よりも荷重がかからないことによる造成の違いである可能性がある。また、北東側では、平坦に仕上げた本堂第VI-1-9層の上に本堂第VI-1-1層の粘土を盛ることで、他よりも高さを上げている場所がある。発掘調査中、本堂北東側では湿気が多く、掘削面からも若干の湧水があったことを考えると、当初から湿気対策を念頭に造成した可能性がある。また、本堂第VI-1-1層を掘り込んだSD02についても、同様に排水機能を有していた可能性がある。

## （2）礎石・束石の据え方

粘土層（本堂第VI層）では、「本か16」、「本そ15」、「本そ18」グリッド周辺で複数のビットを検出した（SP01～26、第8図、図版8）。建築に伴う仮設足場跡の可能性も考えられるが、掘り込みが浅いこと、大引きなどの軸組みを構成する部材の真下に多くが位置することから、三又のような道具で礎石を移動した痕跡ではないかと思われる（社団法人日本造園組合連合会 2012）。

礎石は、本堂第VI層を掘り込んで根石を充填した上に据えられている（第17図、図版9）。「本た18」の礎石に伴う根石中から17世紀前半の遺物（第19図13、図版13）が出土したこと、礎石には動かされた痕跡が確認できること、現在の礎石以外の場所で根石を充填した礎石跡の検出がないことなどから、礎石は本堂Ⅰ期・Ⅱ期を通じて同一の場所で使用していると考えられる。また、束石は砂礫（本堂第V層）中に据えられており、掘り方や根石はない。本堂Ⅰ期の建て方の工程で、本堂第V層を掘り塗めて設置したと考えられる。

なお、石材については、目視での観察では花崗岩が多数を占める。採取先としては、当該地の東側を流れる旭川の可能性がある。

## （3）砂礫の充填

礎石を据えた後の基壇全面には、基壇を安定させるために砂礫（本堂第V層）を敷き詰めており、層厚は最も薄い北側で10cm前後、最も厚い南側で30cm前後である。礎石は上面が地表に露出しているが、大半は本堂第V層で埋められている。本堂第V層には遺物がほとんど混入しないが、ごく稀に17世紀前半から後半の遺物が出土する（第19図11・12、図版13）。出土遺物の年代からは、本堂Ⅱ期建築の際に、本堂第V層の部分的な入れ替えがあった可能性も考えられる。

## （4）土間の構築

南辺の土間（本堂第III層）は、砂礫（本堂第V層）の上に構築される。土間の叩き面は3面確認した（本堂第III-1～III-3層）。全面に敷かれた本堂第III-2層が現在の土間の主体となっており、「本た列」以西ではその下に古い土間（本堂第III-3層）が残存していた。本堂第III-1～III-3層からは17～18世紀代の遺物（第19図1～5、図版13）が出土しており、土間は今までの間に何度かの入れ替えが行われたことが分かる。本堂第III-3層は、土間の入れ替えに伴い西側だけに部分的に残存したと考えられる。このことは、後述するSD01内のかわらけの分布が、本堂第III-3層を確認できない「本た列」以東で希薄になることからも推測できる。SD01内のかわらけの一部や本堂第III-3層が、土間の入れ替えによって攪拌された結果であろう。

本堂第III-4層面で検出したSD01は、本堂第III層直下の本堂第V層を掘り込んだかわらけ埋設遺構であり、小破片から完形品まで数多くのかわらけが出土した。このうち、口縁部残存率1/4以上の個体を抽出した属性表と出土分布図が第9表および第22図である。口縁部に付着する灯芯痕と思われる煤が対角線上にあるものが多く、何らかの儀式に使用されたと考えられる。法量は大・中・小の3タイプ認められるが、灯芯痕の有無とともに、配置の規則性については明確にできなかった。なお、SD01検出面では他にSX05も検出した。SX05は約16cm四方の四角い内寸を持つ石組み遺構で、角塔婆を立てた基礎とも推測できる。位置関係や検出状況などから、両遺構は本堂I期の竣工前に何らかの儀式を執り行つた痕跡と考えられる。

なお、調査前の時点では土間の東端には、布石に平行して掘り込まれた浅い落ち込みがあった。これは、土間と布石の段差を解消するために設けた踏み台を設置した跡と考えられる。西端でも同様の落ち込みが作られた可能性があるが、明確に確認できなかった。

### (5) 表面の整地と近代以降の改変

基壇の造成は、最後に土間以外の場所に玉石（本堂第I'層）を敷いて床下を整えている。本堂第I'層は本堂中央部分に広がり、それを避けるように、縁辺部には本堂第II層を確認できる。本堂第II層下で検出したSX12・13からは、近世の陶磁器の他に近代の陶器やプラスチック片が出土した。配置からも、藩主の菩提寺としての機能がなくなった近代以降に礎石間に掘られた廐棄土坑であると考えられる。他にも本堂縁辺部では性格不明遺構を数基検出したが、その多くが近代以降の可能性がある。また、現況の土間（本堂第III-1・III-2層）表面で検出した焼土遺構（SL01～21）についても、近代以降のものと思われる。

### (6) 延宝4年の火災について

本堂の礎石には被熱が認められず、焼土や炭化物層もなかった。のことから、延宝4年（1676）の火災は床下まで到達しない規模であり、火災後は焼失した建材をすべて除去したうえで本堂II期を建築したのではないかと考えられる。なお、須弥壇南側で出土した17世紀後半の肥前系染付蓋・壺（第20図22、図版14）は、本堂II期建築に伴う何らかの儀式において、砂礫（本堂第V層）を一部除去したうえで粘土（本堂第VI層）を掘り込んで埋設し、発生土で埋め戻したものと思われる。のことからも、本堂第V層は部分的に入れ替えられたことが窺える。

### (7) 発掘調査で判明した本堂の変遷

以上のことから、本堂の変遷は、①湿地を埋め立てる→②粘土を入れ突き固める→③間知石の設置→④礎石下の壺地業（根石を充填）→⑤礎石を据える→⑥砂礫を入れる→⑦軸部を組み上げる→⑧束石を据える→⑨SD01・SX05を用いた儀式→⑩土間を入れる→⑪本堂I期の竣工→⑫延宝4年の火災→⑬火事場処理→⑭再建にあたり礎石は動かさずに砂礫を部分的に入れ替える→⑮須弥壇南に染付壺を埋設→⑯数度に渡る土間の入れ替え、という順序が考えられる。

## 第3節 書院建築までの工程とその後の変遷

書院の基壇は、本堂と同じく17世紀前半に造成されたことは先述した。以下に、検出遺構と出土遺物などから推定される書院建築までの工程とその後の変遷について順を追って述べる。ここでは、延宝4

年(1676)に焼失したとされる書院を「書院Ⅰ期」、焼失後に再建した書院を「書院Ⅱ期」、文化3年(1806)に建て替えた書院(現在の書院)を「書院Ⅲ期」とする(第10表)。

### (1) 埋め立て後の基壇造成(粘土での造成)

書院の基壇は、沢状の窪地を埋立土(書院第VII層)で埋めた後、粘土(書院第VII層)を突き固めて造成している。粘土は本堂ほど複雑に重なり合っておらず、書院第VII-1-3層が主体となっていると推測できるが、書院東西ベルト以北では、更にその上に書院第VII-1-1層を薄く盛って仕上げている。

### (2) 書院Ⅰ期

北側の粘土面(書院第VII-1-1層)を中心に、根石を充填した礎石跡16基(SK P01~16)および礎石様の大きな石4基(S S01~04)を検出した。これらは現在の建物に関係のない場所に位置し、SK P03・12・13・15、S S01・03・04を除いて約2m間隔で規則的に配置する。後述するように、現在の建物に伴う礎石や東石の多くは書院Ⅱ期・Ⅲ期を通じて使用していると考えられるため、礎石跡は書院Ⅰ期に伴うものと推測できる。なお、SK P15の底面付近から出土した18世紀後半の遺物(第21図45、図版15)は、書院Ⅲ期に伴う造成土(書院第IV-4層)から出土した遺物と接合する。このことから、配置に規則性のないSK PやSSの中には、書院Ⅱ期以降の年代になる可能性があるものも含まれる。

「11~12列」・「書ろへは列」では、それぞれ南・東に向かって落ち込む段差を確認した。この段差は、書院の亀腹と考えられる(以下、「11~12列」の亀腹を南亀腹、「書ろへは列」の亀腹を東亀腹という)。両亀腹上の平坦面には礎石跡があり、南亀腹下の平坦面には礎が残存する整地層(書院第VI・VI'層)があることから、両亀腹は書院Ⅰ期に伴うもので、整地層は前庭部的な空間であった可能性がある(第23図)。なお、東亀腹の上端には雨落ちのような礎が残存している。

また、書院第VII層面で検出した礎石様の大きな石(S S05~07)は、書院Ⅰ期と併存した周辺の建物等の礎石である可能性もある。

### (3) 書院Ⅱ期・Ⅲ期に伴う拡張

『天徳寺御座敷絵図』(一般財団法人千秋文庫所蔵、第24図、以下「絵図」という)は年代・由緒等不明であるが、描かれている書院は書院Ⅱ期とされている。その間取りを書院Ⅲ期と比べると、南北の様相はほぼ変わらないものの東側がやや狭く、「書は列」付近が建物の東限であり、それ以東には縁で繋がる数寄屋などが続いている。「書ろへは列」には書院Ⅰ期の東亀腹があり、絵図に描かれた書院の東辺とも一致する。東亀腹の段差を埋めた書院第V-2層からは18世紀代の遺物(第21図38~40、図版15)が出土しており、その年代から、基壇の平坦面を東側に拡張したのは書院Ⅲ期と考えられる。したがって、東亀腹は書院Ⅱ期でも機能しており、書院Ⅲ期の建築にあたって、建物の規模を東側に広げる目的で埋められたものと推測できる。

南亀腹については、段差を埋めた書院第V-1層から18世紀代の遺物(第20・21図32・33、35~37、図版14・15)が出土していることから、ここも書院Ⅲ期建築時に埋められたと考えられる。ただし、絵図に描かれた書院Ⅱ期は書院Ⅲ期と南北の間取りがほぼ同じであることを考えると、書院Ⅱ期では建物を南亀腹以南まで拡張したものとの段差はそのままとし、床下には書院Ⅰ期の前庭部が露出していたと推測できる。

亀腹の埋め立ての順番は、「書ろ11~15サブトレーナー」土層断面(第9図、図版11)の観察から、最初に東亀腹の書院第V-2層、続いて南亀腹の書院第V-1層であることが分かる。

以上のことから、絵図に描かれた書院は、書院II期である可能性が非常に高いことが窺える。また、「書り13」の礎石直下で検出した礎石様の大きな石（S S 08）は、南龜腹を埋める前に、書院I期の前庭部が露出した状態で据えられた書院II期の礎石である可能性も考えられる。

#### （4）礎石・東石・布石の据え方

礎石は、粘土層（書院第VII層）を掘り込んで根石を充填した上に据えられている（第18図、図版12）。書院II期と考えられる明確な礎石跡がなく、絵図では書院II・III期は東側を除き間取りがほぼ同じであることなどから、書院III期に伴う礎石や東石の多くは、拡張した東辺および南辺を除いて書院II期・III期を通じて同じ場所で使用していると考えられる。なお、東石は書院第IV層中にあり、据え方は基本的には本堂と同じ方法と推測できる。

布石下では、径35～50cm前後の石が規則的に配置されていることを部分的に確認した。布石の沈下を防止するための根石と考えられる。

#### （5）書院III期に伴う遺構

書院III期建築にあたっては全面を書院第IV層で造成し直しており、礎石や東石は上面以外の大半がこの層で埋められている。書院III期に伴う遺構として、礎が充填するSX24・25・31・32がある。これらは検出面が異なるものの、規模や様相から同時期の遺構と考えられる。SX24・25の検出面である書院第IV-6層からは18世紀前半の遺物（第20図31、図版14）が出土しているため、これらの遺構は書院III期に伴うものと考えられるが、根太や大引を取り付けた後では掘り込めない場所に位置することから、建築前に何らかの用途で用いられたものと推測できる。

#### （6）延宝4年の火災について

書院でも礎石には被熱が認められなかつたが、書院I期の前庭部（書院第VI・VI'層）直上で、一部層になって残存する炭化物層（書院第V'層）を確認した。書院第V'層からは18世紀代の遺物（第21図41・42、図版15）が出土するため、延宝4年（1676）の火災による炭化物層と断定はできないが、第V'層は書院II期の床下で露出していた可能性があり、前庭部を第V-1層で埋めるまでの過程でこれらの遺物が混入したとも考えられる。なお、書院第VI層からも18世紀代の遺物（第21図44、図版15）が出土しているが、これも同様に書院II期で混入した可能性がある。

書院第VI・VI'-1層の礎の間から出土した炭化物2点について、放射性炭素年代測定を行った（別編「放射性炭素年代（AMS測定）」参照）。その結果、<sup>14</sup>C年代で170±20yrBP、曆年較正年代（1σ）で大きく4つの範囲（1670～1682calAD、1735～1781calAD、1799～1806calAD、1930～1944calAD）で年代が示された。17世紀後半以降は較正曲線が不規則であるため複数の年代が示されたが、1670～1680年代の値からは、この層に関する炭化物は書院I期焼失に関係する可能性があることを指摘できる。

#### （7）発掘調査で判明した書院の変遷

以上のことから、書院の変遷は、①湿地を埋め立てる→②粘土を入れ突き固める→③礎石下の壺地業（根石を充填）→④南と東に龜腹、南龜腹下に前庭部がある小規模な書院I期の竣工→⑤延宝4年の火災→⑥火事場処理→⑦南龜腹以南に建物規模を拡張して書院II期を再建（床下の南龜腹は埋めない）→⑧建て替えのため書院II期を解体→⑨両龜腹を埋め平坦面を拡張→⑩礎石は動かさずに再造営（拡張部

には新たに礎石を据える)→⑪軸部を組み立てる→⑫東石を据える→⑬書院Ⅲ期の竣工、という順序が考えられる。

#### 第4節 調査の成果

調査の成果を要約すると、以下のとおりである。

- ・本堂・書院とも創建時の基壇がそのまま残っていることが分かった。
- ・基壇造成にあたっては、大部分が湿地である旧地形を埋め立て、その上に粘土を突き固めるという大規模な地業を行っていることが分かった。
- ・本堂では、土間部分でかわらけ埋設遺構と石組み遺構を検出した。これらは、本堂Ⅰ期の竣工間際に行った何らかの儀式に伴うものと考えられる。
- ・本堂では、延宝4年(1676)の火災による痕跡は確認できなかった。
- ・本堂Ⅰ期は延宝4年(1676)の火災で焼失し、本堂Ⅱ期が貞享4年(1687)に再建されている(第10表)。調査では、その変遷過程が判明した。なお、慶安2年(1649)の客殿(本堂)普請の記事が本堂の再建を示す記載であるとすれば、本堂Ⅰ期以前の遺構等を確認できなかつたことを踏まえると、それ以前の本堂は現在と別の場所に建っていたか、あるいは本堂Ⅰ期と同じ礎石の上に建つ同規模の建物であったと考えられる。
- ・書院では、延宝4年(1676)の火災の可能性がある痕跡を一部で確認した。
- ・書院Ⅰ期は延宝4年(1676)の火災で焼失したとされ、書院Ⅱ期が貞享2年(1685)に再建、書院Ⅲ期が文化3年(1806)に建て替えられている(第10表)。調査では、その変遷過程が判明した(第23図)。
- ・書院の具体的な変遷過程が判明したこと、『天徳寺御座敷図』(一般財団法人千秋文庫所蔵)は書院Ⅱ期(1685~1806)を描いた絵図であることを明確にできた。

#### [引用・参考文献]

- 宗教法人天徳寺 1994 『秋田・天徳寺史』  
財団法人文化財建造物保存技術協会 編 1998 『重要文化財天徳寺山門・総門修理工事報告書』  
秋田市 2000 『秋田市史 第15巻 美術・工芸編』  
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』  
秋田市教育委員会 2002 『秋田市 藩校明徳館跡 一市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書—』  
伊藤武士 2003 「出羽のかわらけ 出羽北部—秋田県—」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会  
秋田市教育委員会 2007 『秋田市 渕城跡 一秋田都市計画道路事業(土崎駅前線)に伴う発掘調査報  
告書(平成17年度調査区)ー』  
社団法人日本造園組合連合会 2012 『人力による運搬組立て工法の手引』

第9表 1号溝跡(SD01)出土かわらけ属性表

No.	グリッド	標高 (m)	口径 (cm)	口縁部 残存率	分類	配置	口縁部の 灯芯痕数	備考	取上げ 番号
1	本る21	12.849	9.4	4／4	小	○	12	第19図7	102
2	本る21	12.844	9.6	4／4	小	▲	12	2>3	105
3	本る21	12.843	9.8	4／4	小	○	-	2>3	106
4	本か21	12.814	10.4	1.5／4	中	不明	-		
5	本か21	12.814	10.4	2／4	中	不明	-		
6	本か21	12.814	12.4	2.5／4	大	不明	10		
7	本か21	12.872	10.0	1.5／4	小	不明	1		103
8	本か21	12.761	10.8	4／4	中	▲	12	8>9、第19図8	110
9	本か21	12.751	11.0	4／4	中	○	-	8>9	112
10	本よ21	12.819	11.0	3.5／4	中	○	10		104
11	本た21	12.743	9.6	1.5／4	小	不明	-		109
12	本た21	12.743	10.4	3.5／4	中	不明	-		109
13	本た21	12.743	10.4	2／4	中	不明	9		109
14	本た21	12.762	11.0	4／4	中	○	6	14>15、第19図9	115
15	本た21	12.759	11.0	4／4	中	○	-	14>15、わずかに15>16	116
16	本た21	12.759	10.8	3.5／4	中	▲	-	16>17、わずかに15>16	117
17	本た21	12.745	11.0	4／4	中	○	6	16>17	119
18	本た21	12.819	11.0	2.5／4	中	▲	複数		114
19	本れ21	12.723	9.6	1.5／4	小	不明	5		186
20	本れ21	12.679	9.4	3／4	小	○	10		194
21	本そ21	12.674	9.4	1／4	小	不明	1		148
22	本そ21	12.714	12.4	3／4	大	▲	全面に煤	第19図10	157
23	本そ21	12.701	12.4	1／4	大	○	3		159
24	本つ21	12.707	10.4	4／4	中	▲	4		156
25	本つ21	12.708	8.4	3.5／4	小	▲	局所的に6		155
26	本つ21	12.802	10.4	1／4	中	不明	複数		123

※口縁部残存率が1／4以上あるかわらけの属性表である。

※「分類」は、以下の基準で分類した。

大：口径12.4cm

中：口径10.4～11.0cm

小：口径10cm以下

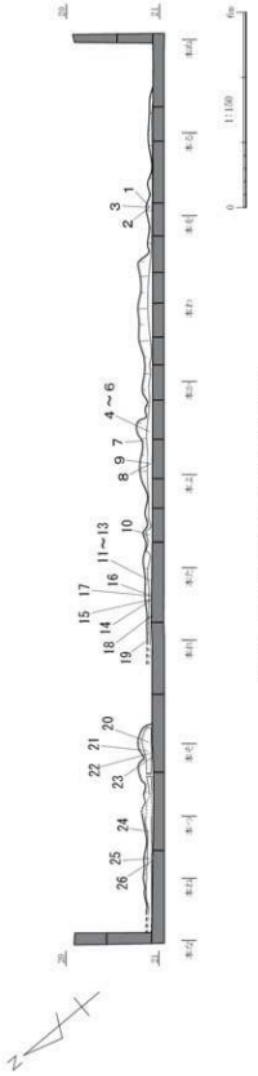
※「配置」は、以下の基準により記号で表した。

○：見込みを上にして置かれているもの

▲：底部を上にして伏せて置かれているもの

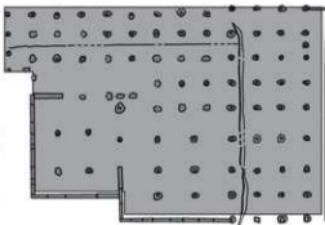
※明らかに重なっているものは、不等号で表した。

(2が3の上に置かれている場合は、「2&gt;3」とした。)

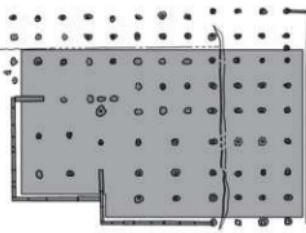


第22図 1号溝跡(S001)出土かわらけ分布図

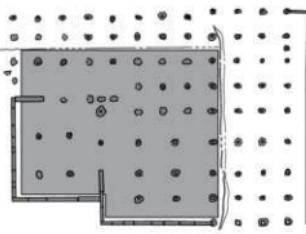
書院Ⅲ期(1806～現在)



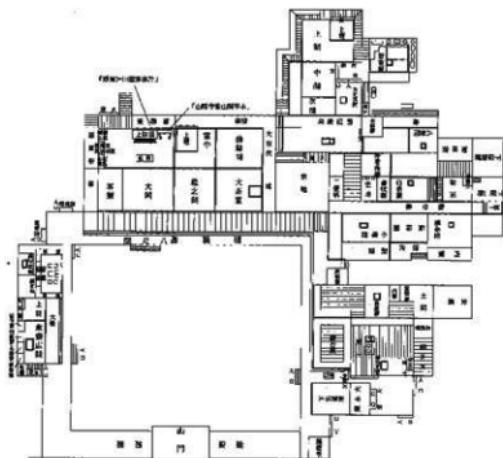
書院Ⅱ期(1685～1806)



書院Ⅰ期(～1676)



第23図 書院変遷模式図



第24図『天徳寺御座敷絵図』(一般財団法人千秋文庫所蔵)

財団法人文化財建造物保存技術協会 編 1998 から転載

第10表 天徳寺略年表

年代	出来事	本堂	書院
第1 四半期	<ul style="list-style-type: none"> <li>寛永元年(1624)12月、西の刻檜山本屋敷の天徳寺が、総門を残して火災焼失する(※1・5)</li> <li>寛永2年(1625)5月、義宣より天徳寺移転先は「和泉之内ニ見たて」と承諾を得る(※1)</li> <li>同年6月、義宣に「客殿・大庫裏・小庫裏は年内に完成予定」と報告(※2)</li> </ul>		
第2 四半期	<ul style="list-style-type: none"> <li>寛永5年(1628)4月、火災焼失した天徳寺の再建工事が落慶となり、入寺法式を行(※5)(伽藍の整備状況は不明)</li> <li>慶安2年(1649)、客殿(本堂)普請(※3)(再建か)</li> </ul>	本堂Ⅰ期	書院Ⅰ期
17 C 第3 四半期			
第4 四半期	<ul style="list-style-type: none"> <li>延宝4年(1676)12月、西の刻庫裏中間より出火し、本堂・御影堂・僧堂・米蔵などを焼失する(※4)</li> <li>貞享元年(1684)5月、客殿(本堂)建築用材の見積ができ能代へ発注(※3)</li> <li>貞享2年(1685)5月、書院普請(※5)</li> <li>貞享3年(1686)8月、客殿(本堂)のちょうな立て(※3)</li> <li>貞享4年(1687)2月、客殿(本堂)の柱立て(※3)</li> <li>同年8月、方丈(本堂)普請(※3)</li> </ul>	本堂Ⅱ期	書院Ⅱ期
18 C 前半			
C 後半			
19 C 前半	文化3年(1806)8月、書院建て替え(※6)		書院Ⅲ期
C 後半			

※1 梅津政景日記 ※2 秋田藩家藏文書 ※3 国典類抄 ※4 羽陰史略 ※5 天徳寺史 ※6 棚札

#### 参考文献

『秋田・天徳寺史』1994

『重要文化財天徳寺山門・総門修理工事報告書』1998

『秋田市史 第15巻 美術・工芸編』2000

## 別編 放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

秋田県秋田市に所在する万圓山天徳寺（R1BT）の測定対象試料は、本堂と書院の堆積層から出土した炭化物 10 点である（第 11 表）。

### 2 化学処理工程

- (1) メス・ビンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「Aa」と第 11 表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 3 測定方法

加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、<sup>14</sup>C の計数、<sup>14</sup>C 濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C 濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の <sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（第 11 表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 <sup>14</sup>C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C 年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 11 表に、補正していない値を参考値として第 12・13 表に示した。<sup>14</sup>C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の <sup>14</sup>C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68. 2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の <sup>14</sup>C 濃度の割合である。pMC が小さい (<sup>14</sup>C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (<sup>14</sup>C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を第 11 表に、補正していない値を参考値として第 12・13 表に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、δ<sup>14</sup>C補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第12・13表に示した。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 5 測定結果

測定結果を第11～13表に示す。

試料10点の<sup>14</sup>C年代は、370±20yrBP(炭化物①)から170±20yrBP(炭化物⑨、⑩)の間にある。历年較正年代( $1\sigma$ )は、最も古い炭化物①が1465～1618cal ADの間に2つの範囲、最も新しい炭化物⑩が1670～1944cal ADの間に4つの範囲で示される。本堂と書院の試料を比較すると、年代が重なり合うが、書院では比較的年代の新しい試料が目に付く。なお、炭化物②、⑦、⑨、⑩の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(第13表下の警告参照)。

また、ここで測定された試料は、一部明確でないものもあるが、多くは木炭と見られるため、次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された試料にはいずれも樹皮が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は、炭化物⑦を除く9点が60%以上の十分な値であった。炭化物⑦は土に同化している炭化物の小片で、土を十分除去できなかった。炭素含有率は28%というやや低い値で、測定された炭素の由来に若干注意を要するが、測定結果に影響するほどではないと見られる。

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337–360  
Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869–1887  
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19(3), 355–363

第 11 表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-191776	炭化物①	本堂 VI-4-8 層	炭化物	AAA-29.22 ± 0.26	370 ± 20	95.54 ± 0.27
IAAA-191777	炭化物②	本堂 VI-3-3 層	炭化物	AaA-26.01 ± 0.25	260 ± 20	96.86 ± 0.27
IAAA-191778	炭化物③	本堂 VI-4-1 層	炭化物	AAA-26.68 ± 0.24	350 ± 20	95.70 ± 0.26
IAAA-191779	炭化物④	本堂 VI-3-5 層	炭化物	AaA-27.26 ± 0.23	310 ± 20	96.26 ± 0.27
IAAA-191780	炭化物⑤	本堂 VI-3-6 層	炭化物	AAA-29.03 ± 0.25	340 ± 20	95.86 ± 0.27
IAAA-191781	炭化物⑥	書院 VII-1-3 層	炭化物	AAA-26.18 ± 0.27	360 ± 20	95.63 ± 0.27
IAAA-191782	炭化物⑦	書院 VII-1-3 層	炭化物	AaA-28.47 ± 0.29	250 ± 20	96.96 ± 0.26
IAAA-191783	炭化物⑧	書院 VII-1-3 層	炭化物	AAA-28.77 ± 0.24	340 ± 20	95.83 ± 0.27
IAAA-191784	炭化物⑨	書院 VI'-1 層	炭化物	AaA-23.45 ± 0.24	170 ± 20	97.95 ± 0.27
IAAA-191785	炭化物⑩	書院 VI 層	炭化物	AAA-26.48 ± 0.24	170 ± 20	97.90 ± 0.28

[IAA 登録番号 : #9962]

第 12 表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、曆年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-191776	440 ± 20	94.71 ± 0.26	366 ± 22	1465calAD - 1517calAD (46.9%) 1595calAD - 1618calAD (21.3%)	1452calAD - 1524calAD (56.4%) 1558calAD - 1632calAD (39.0%)
IAAA-191777	270 ± 20	96.66 ± 0.27	256 ± 22	1641calAD - 1665calAD (61.2%)* 1786calAD - 1793calAD (7.0%)*	1527calAD - 1553calAD (8.8%)* 1633calAD - 1669calAD (73.3%)* 1781calAD - 1799calAD (13.3%)*
IAAA-191778	380 ± 20	95.37 ± 0.25	353 ± 21	1477calAD - 1522calAD (33.7%) 1575calAD - 1625calAD (34.5%)	1459calAD - 1528calAD (45.2%) 1553calAD - 1634calAD (50.2%)
IAAA-191779	340 ± 20	95.81 ± 0.26	306 ± 22	1522calAD - 1575calAD (49.5%) 1585calAD - 1590calAD (2.9%) 1625calAD - 1644calAD (15.8%)	1496calAD - 1507calAD (2.4%) 1512calAD - 1601calAD (69.6%) 1616calAD - 1648calAD (23.3%)
IAAA-191780	410 ± 20	95.07 ± 0.26	339 ± 22	1494calAD - 1524calAD (22.1%) 1559calAD - 1602calAD (33.3%) 1615calAD - 1631calAD (12.9%)	1475calAD - 1636calAD (95.4%)
IAAA-191781	380 ± 20	95.40 ± 0.26	358 ± 22	1470calAD - 1521calAD (43.2%) 1591calAD - 1620calAD (25.0%)	1455calAD - 1526calAD (49.2%) 1556calAD - 1633calAD (46.2%)
IAAA-191782	310 ± 20	96.27 ± 0.25	248 ± 21	1644calAD - 1664calAD (68.2%)*	1529calAD - 1539calAD (1.5%)* 1635calAD - 1670calAD (73.1%)* 1780calAD - 1800calAD (20.8%)*

第13表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、曆年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-191783	$400 \pm 20$	$95.09 \pm 0.26$	$342 \pm 22$	1490calAD - 1524calAD (23.5%)	1471calAD - 1532calAD (35.5%)
				1559calAD - 1603calAD (30.3%)	1538calAD - 1636calAD (59.9%)
				1610calAD - 1631calAD (14.4%)	
IAAA-191784	$140 \pm 20$	$98.26 \pm 0.27$	$166 \pm 22$		1665calAD - 1695calAD (16.9%)*
				1671calAD - 1682calAD (10.4%)**	1726calAD - 1786calAD (44.5%)**
				1735calAD - 1779calAD (41.2%)**	1793calAD - 1814calAD (10.6%)**
				1799calAD - 1806calAD (5.9%)**	1837calAD - 1844calAD (0.8%)**
				1930calAD - 1942calAD (10.6%)**	1851calAD - 1869calAD (2.2%)**
IAAA-191785	$200 \pm 20$	$97.60 \pm 0.27$	$170 \pm 22$		1874calAD - 1876calAD (0.3%)**
				1670calAD - 1682calAD (11.8%)**	1917calAD - ... (20.0%)**
				1736calAD - 1781calAD (42.0%)**	
				1799calAD - 1805calAD (5.9%)**	1664calAD - 1694calAD (17.6%)**
				1935calAD - 1944calAD (8.5%)**	1726calAD - 1813calAD (57.2%)**
					1918calAD - ... (20.6%)**

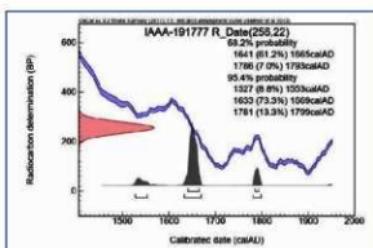
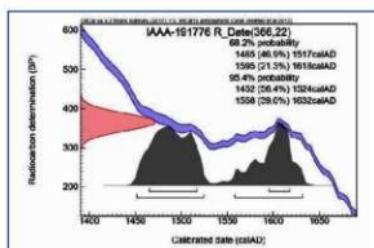
[参考値]

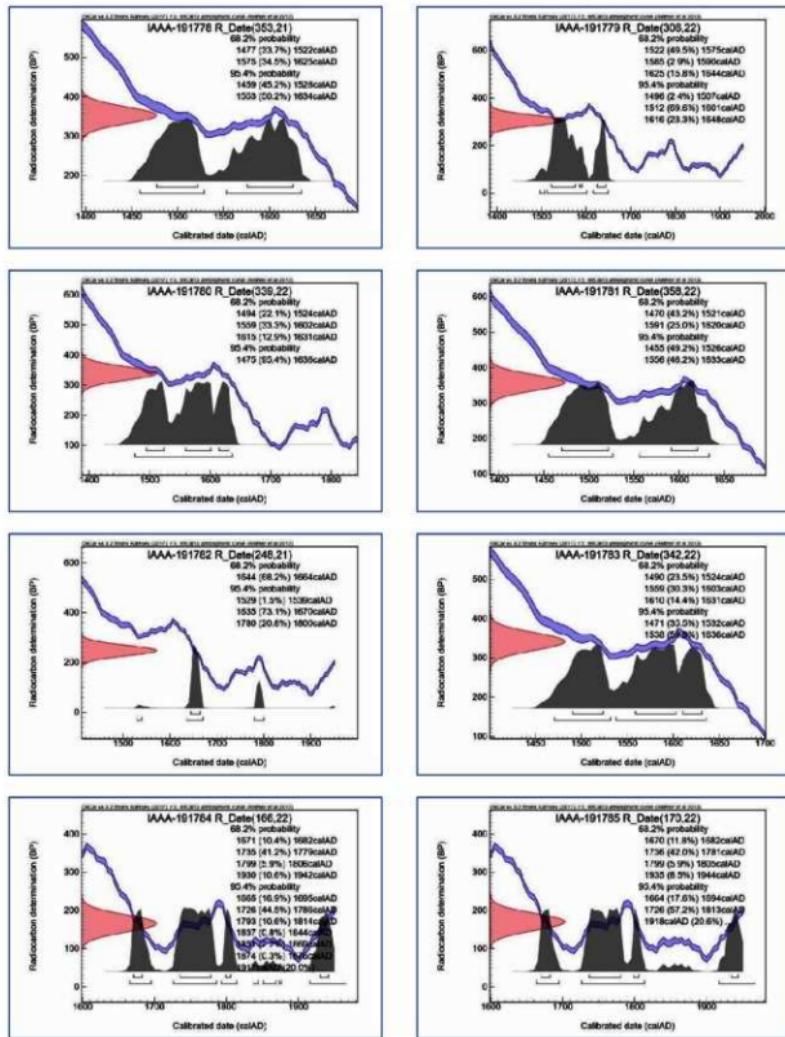
\* Warning! Date may extend out of range

\*\* Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

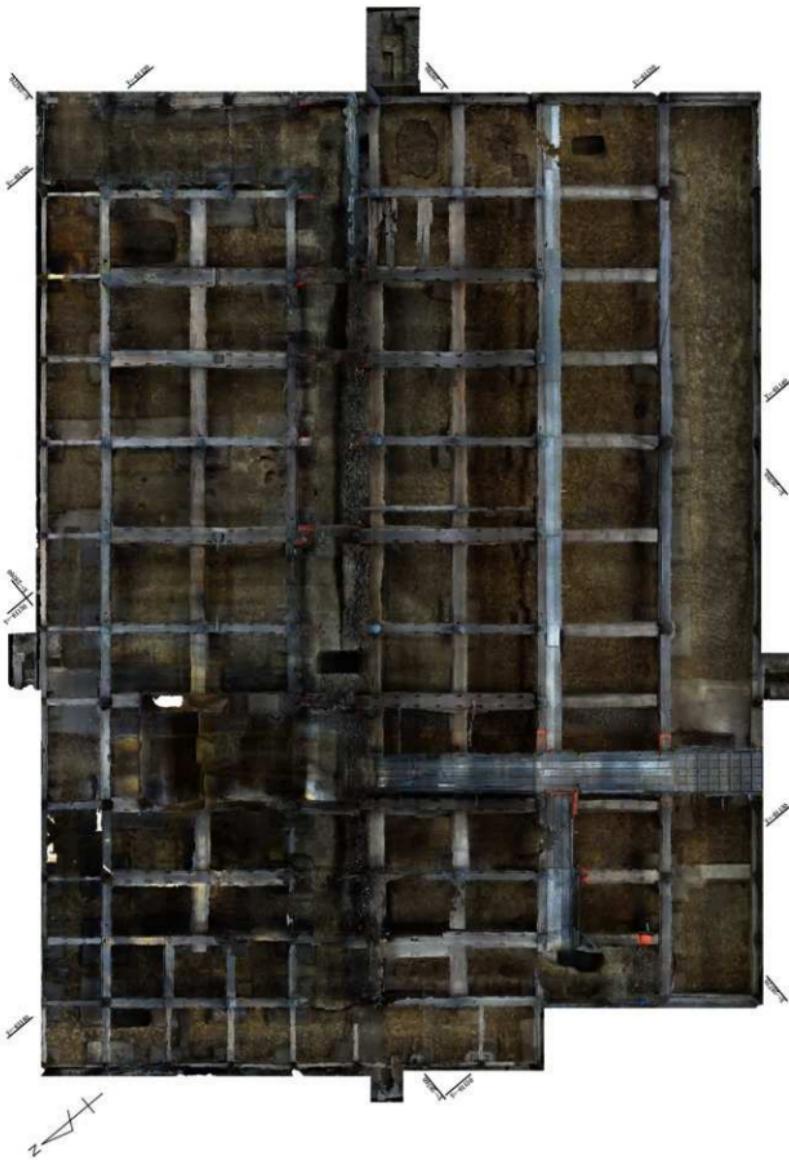
(これらの警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の  $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正年代が、当該曆年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。\*、\*\*の順にその可能性が高くなる。)



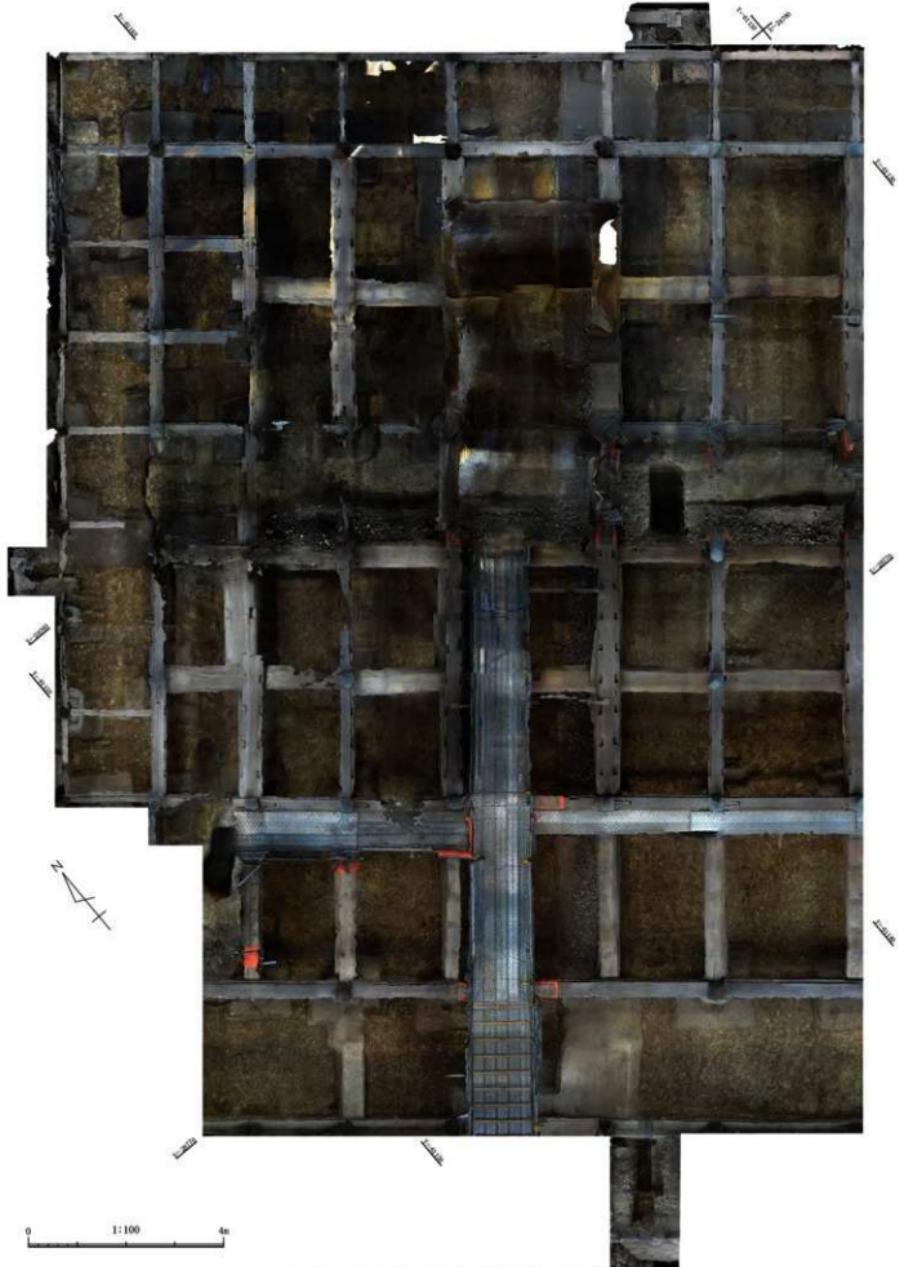


第25図 曆年較正年代グラフ（参考）

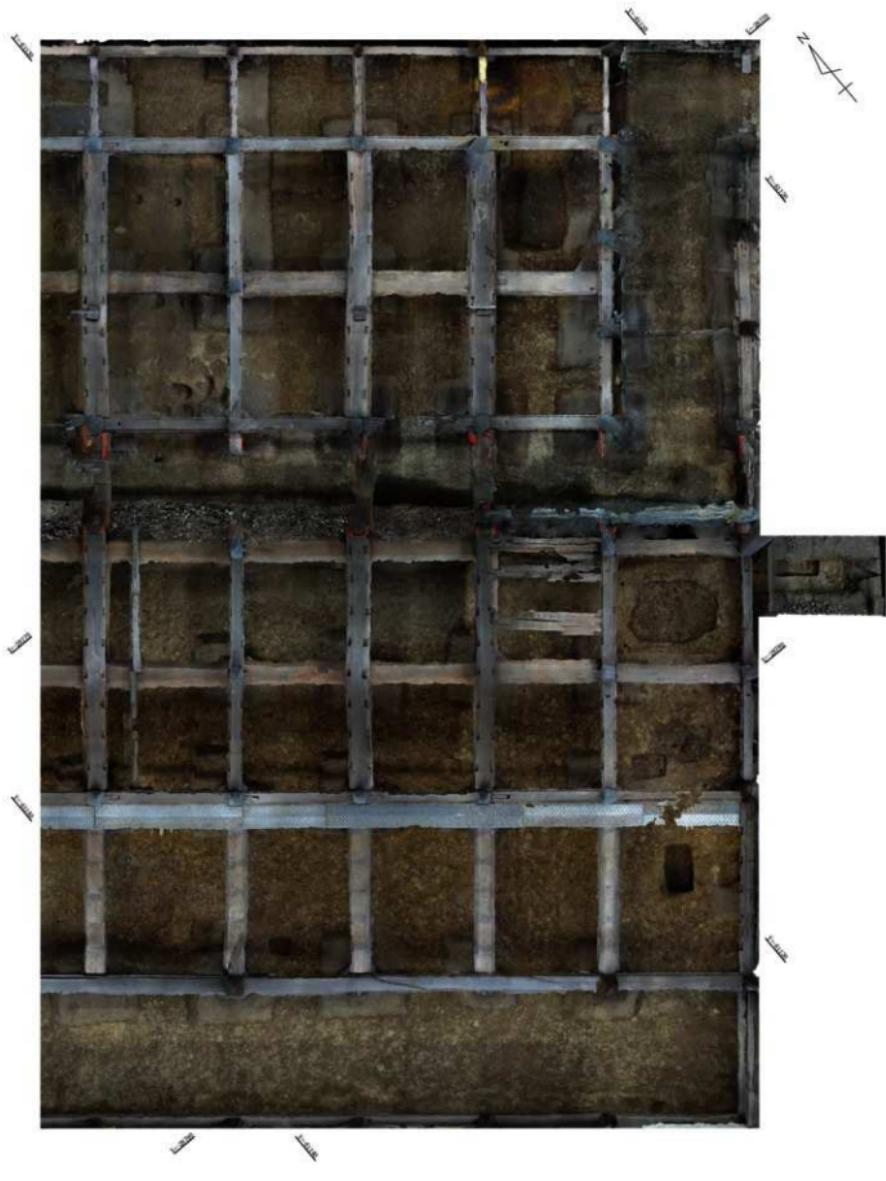
1:150



図版 1 本堂第VI層面全景(オルソ画像)

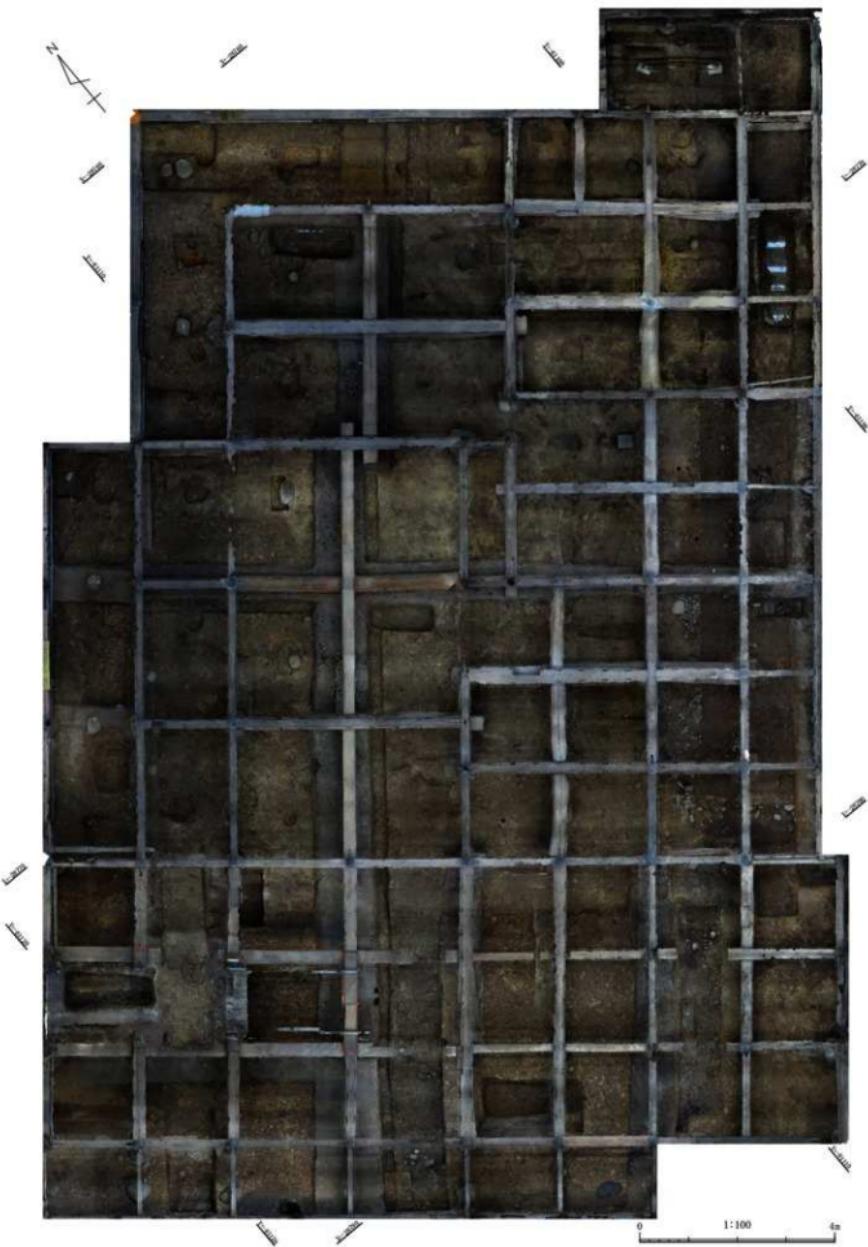


図版2 本堂第VI層面全景西半分(オルソ画像)



0 1:100 4m

図版3 本堂第VI層面全景東半分(オルソ画像)



図版4 書院第V～VII層面全景(オルソ画像)



1 本よへた 20 本堂第1層（調査前）（南から北）



2 本堂 土間（調査前）（東から西）



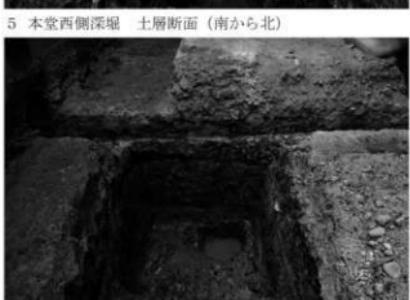
3 本堂北側深堀 土層断面（東から西）



4 本堂北側深堀 土層断面（東から西）



5 本堂西側深堀 土層断面（南から北）



6 本堂南側深堀 土層断面（東から西）



7 本堂東側深堀 土層断面（南から北）



8 本ぞ 12 第II-2-1層 榆出状況 (北から南)



9 本そ 13～15 第II-2-1・V層境界 榆出状況 (南から北)



10 本堂南北ベルト (本ぞ 20・21) 土層断面 (東から西)



11 本つ 20・21 ベルト 土層断面 (東から西)



12 5号性格不明造構 土層断面 (西から東)



13 本た 21 1号溝跡 かわらけ出土状況 (北から南)



14 本た 21 1号溝跡 かわらけ出土状況 (東から西)



15 本そ 21 1号溝跡 かわらけ出土状況 (西から東)



16 本堂南北ベルト（本丸11） 土層断面（東から西）



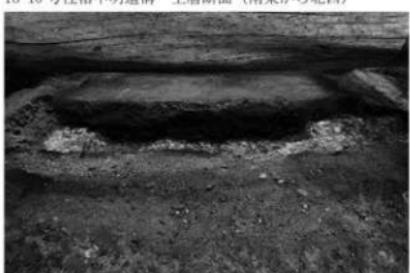
17 1～9号柱列 完掘状況（西から東）



18 10号性格不明遺構 土層断面（南東から北西）



19 11号性格不明遺構 土層断面（東から西）



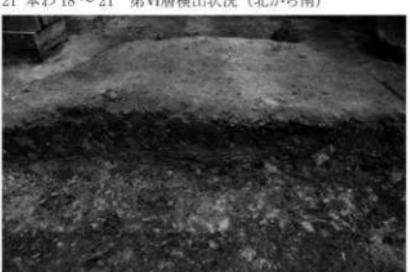
20 12号性格不明遺構 土層断面（南から北）



21 本丸18～21 第VI層検出状況（北から南）



22 本丸12～16 第VI-1～5層 検出状況（南から北）



23 本丸11～14ベルト（本丸11～12） 土層断面（東から西）



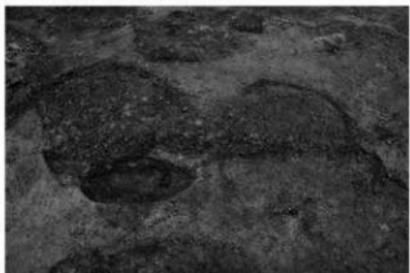
24 本か 11～14 ベルト（本か 14） 土層断面（東から西）



25 2号溝跡 検出状況（西から東）



26 1～14号ピット 検出状況（北から南）



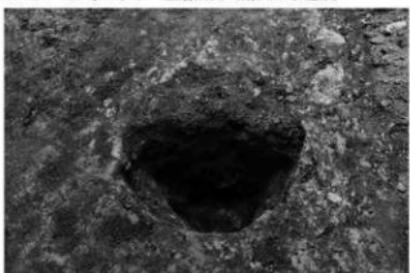
27 7～9号ピット 土層断面（北東から南西）



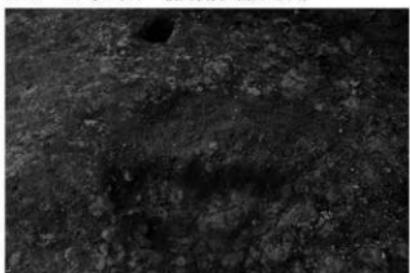
28 10～12号ピット 土層断面（南西から北東）



29 27～29号ピット 検出状況（東から西）



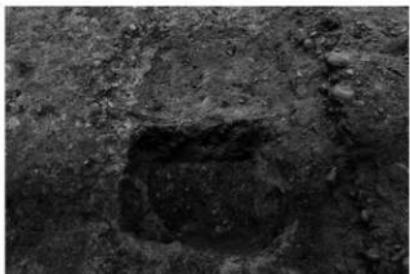
30 27号ピット 土層断面（東から西）



31 28号ピット 土層断面（東から西）



32 29号ピット 土層断面（東から西）



33 18号性格不明遺構 土層断面（北から南）



34 磚石本た18 土層断面（西から東）



35 磚石本た18 土層断面（北から南）



36 書院 第1-1層（調査前）（南東から北西）



37 書院 11～12列の段差（調査前）（西から東）



38 書院北側深堀 土層断面（東から西）



39 書院中央深堀 土層断面（南から北）



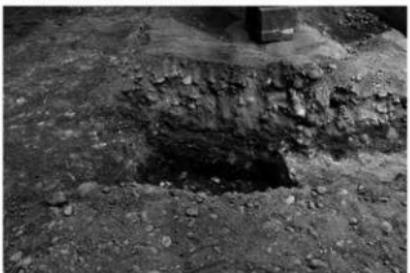
40 書院西側深堀 土層断面（南から北）



41 書院東側深堀 土層断面（南から北）



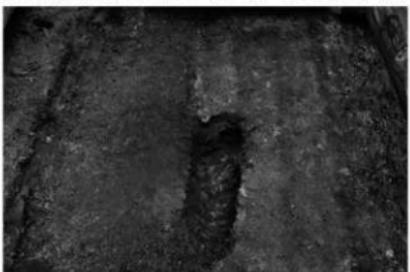
42 書院南側深堀 土層断面（東から西）



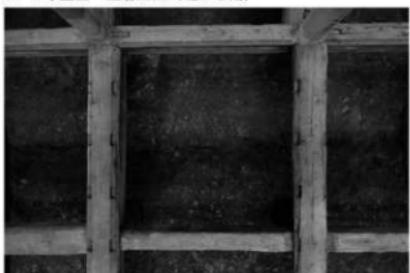
43 書と又～本ぬ 15 サブトレーンチ (本ぬ 15) 土層断面（南から北）



44 1号盛土 土層断面（北から南）



45 24号性格不明遺構 土層断面（西から東）



46 書は～～12 第V-1・VII層境界 検出状況（南から北）



47 書ら4～6 第V-2・VII層境界 検出状況（北から南）



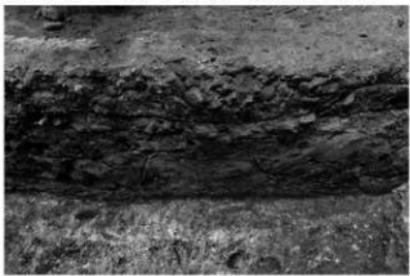
48 書ろ7又～10 第V-2・VII層境界 検査出状況（南から北）



49 書ろ11～15 サブトレレンチ（書ろ11～12） 土層断面（西から東）



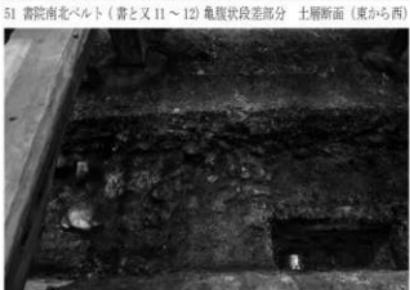
50 書～11・12 亀腹状段差 検査状況（南西から北東）



51 書院南北ベルト（書と又11～12）亀腹状段差部分 土層断面（東から西）



52 書院東西ベルト（書ろ8）亀腹状段差 土層断面（南から北）



53 書ろ12～15 サブトレレンチ（書ろ13） 第VI層検出状況（西から東）



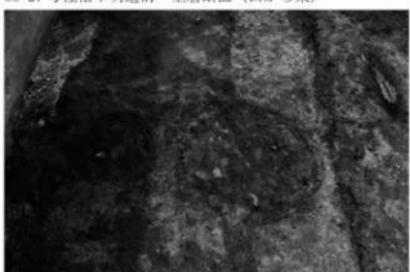
54 書へ12～16 サブトレレンチ（書へ13） 第VI”層検出状況（西から東）



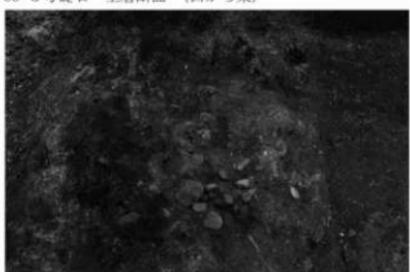
55-27 男性格不明遺構 土層断面（西から東）



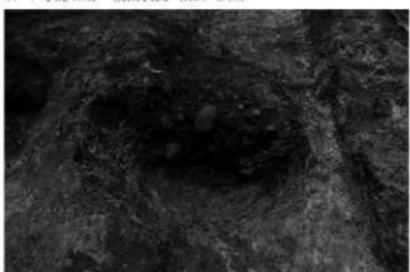
56-3号礎石 土層断面（西から東）



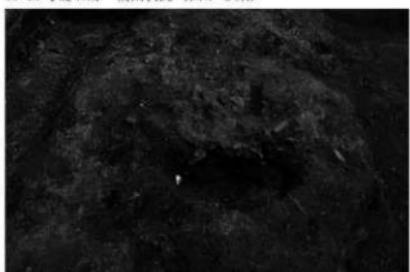
57-7号礎石跡 検出状況（東から西）



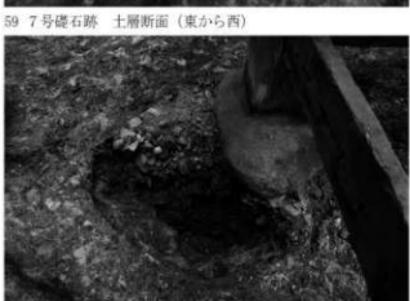
58-15号礎石跡 検出状況（西から東）



59-7号礎石跡 土層断面（東から西）



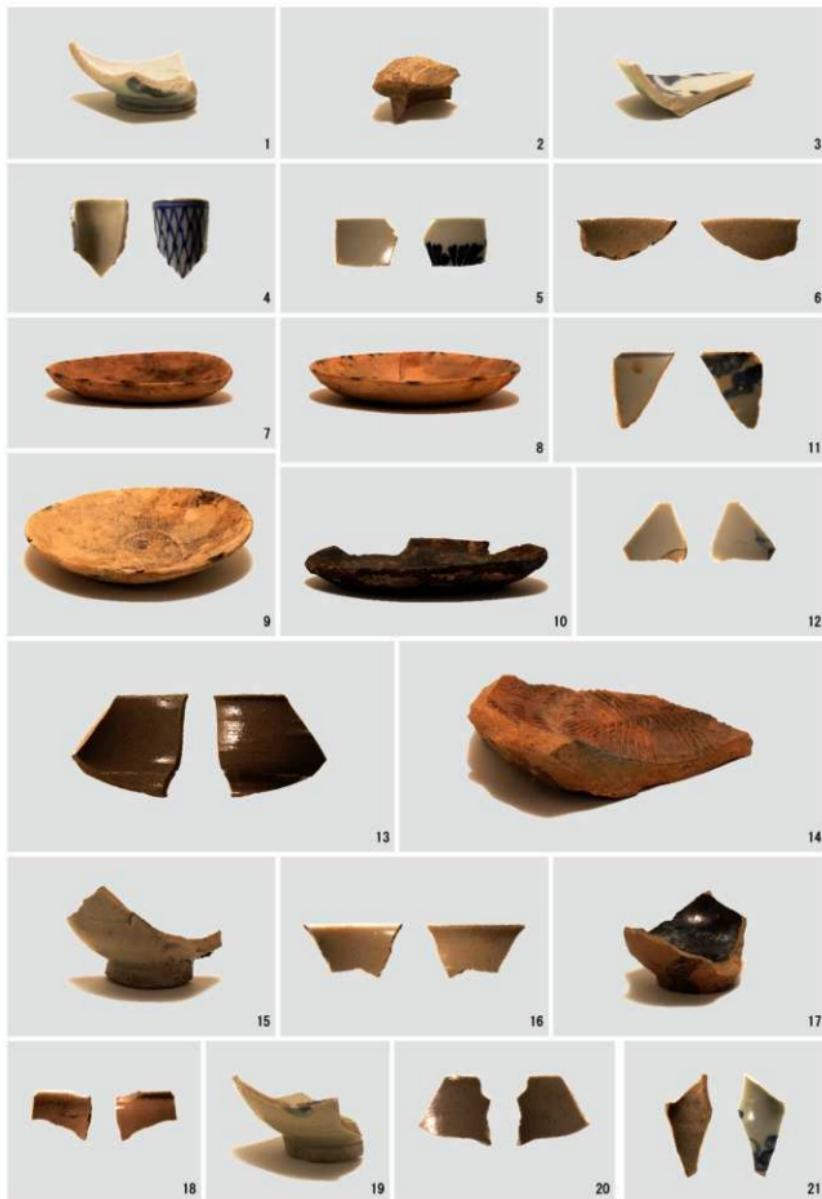
60-15号礎石跡 土層断面（西から東）



61 磚石書ち5又 土層断面（南から北）



62 磚石書へ11 土層断面（北東から南西）



図版 13

出土遺物 (S = 約 5 分の 2)



22-1・2



23



24



25



26



27



28



30



29



31



32



33



## 報 告 書 抄 錄

---

---

秋田市

万固山天徳寺

—重要文化財天徳寺本堂ほか2棟保存修理事業に伴う発掘調査報告書—

発 行 令和2年9月18日

編 集 秋田市教育委員会

(秋田市観光文化スポーツ部文化振興課)

〒010-8560 秋田市山王一丁目1番1号

TEL 018-888-5607 FAX 018-888-5608

---